

---

# 遊戯王5D's -ANOTHER LEGEND-

シルフ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王5D's - ANOTHER LEGEND -

### 【Nコード】

N2994W

### 【作者名】

シルフ

### 【あらすじ】

それは描かれなかった物語。スピードの中で行われるライディングデュエル、それは人々を魅了し進化の渦に巻き込んでいく。その中に伝説と唄われるほどのチームがあった。彼らはチーム5d's、五つの竜の痣を持った彼らは世界を救った。そしてこれより描くは彼らの影たるシグナーとその仲間たちの決して描かれることのない歴史の闇に葬られた物語である。

# 序章 - The legend of another NEW HERO

そこは地獄だった

燃え盛る炎

そして、《家族だったモノ》

そんな中で少年はただ一人生き残っていた。  
空に浮かぶのは見た事の無い怪物。モンスター

そんな地獄のような中でも少年は狂わずにいた、いや《狂わずにいてしまった》

それが少年にとっての不幸だった、狂うこともできずただ愛していた人物たちの死にざまをまざまと見せつけられていた。

少年の胸の内には奪われた事に対する怒りも憎しみもなかった、ただあったのは虚しさと哀しみ。

なぜ奪うのか？なぜ自分の一族なのか？

そんな答えの出そうにない疑問が彼をむしばんだ。

「父さん……母さん……冥闇<sup>メイア</sup>……光輝！」

既に死んでいるとは理解している、だがそれでも少年、光<sup>ひかり</sup> 遊徒<sup>ゆうと</sup>は手を伸ばし続ける。

その手には誕生日祝いとして送られた決闘盤と一束のデッキ<sup>デュエルディスク</sup>。

それをしっかりと抱えゆつくりと遊徒は家族だったモノに手を伸ばし

そして唐突に遊徒は目覚めた。

久々に見た悪夢に体中は汗でびっしょりになっている。着ていたものを脱ぎ去り洗濯機に放りこみシャワーを浴びる。

そして遊徒は先ほどの夢の意味を考える、と言っても遊徒にとってあの夢の意味はただ一つしかない。

「因縁の闘いの狼煙……か」

夢を見るときは何かしらの意味がある。自分の未来に関係がある事や何かしらの予兆、力が強いものにはその傾向が強い。遊徒もそういった者の一人だ、彼の右腕には数千年に一度しか顕れない痣があり、その痣は遊徒に危機を知らせてくれる。だからこそ彼にとつてこの夢は大きな意味があるのだ。

そして、彼が遂行しなければならぬ使命の始まりを示していた。

「ふむ、とうとうこの時が来たようじゃの」

「ああ、おばあちゃんの言い付けを守って頑張っていくよ」

「守るだけではいかにぞ、時としてそれを破る覚悟を持たねばならん」

「分かってるさ、ばっちゃん。それじゃ、行ってくる」

それだけ言い残し遊徒は家を出た。

自らのDホイール、シャドウ・オブ・シュバリエに跨がって少年は闘いの運命に飛び込んでいった。

「行っ たか……」

遊徒の祖母、光　夏海は孫の出立を見届けすつと目を閉じた。  
だがそれも一瞬で目をカツと見開くと何処からともなく決闘盤を取りだし装着、既にデッキもセットされている。

「可愛い孫の門出じゃ。……貴様らの内、七割は道連れにしてくれよう」

視線の先には明らかに異質な集団、その集団は夏海の発言を受け臨戦体制に入る。

その腕には例外なく決闘盤がはめられている。

それを見た夏海は口端をにやりと持ち上げ、集団を睨み付ける。

ここに居るのは自分の血族を奪ってきた憎き仇敵、本来なら七割と言わず全て葬り去りたいところだが年のせいか体の力は老いていく一方、だから全てを奪う事は出来ないが使命は孫に託した。

後は孫を傷つけようとするこの不逞の輩を排除するために戦うだけだ。

「さあ、断罪の時間じゃよ」

夏海の言葉と共に決闘（死闘）が始まった。

## First turn・邪眼

「……」

遊徒は自分が家を出てから自宅付近で起きた爆発を目にしていた。あれは間違いなく自身を狙ったもの、ホイールを操縦しながら遊徒は右腕に視線を落とす。

これは遊徒が物心着いたときからあったもの、これがあったから自分が、自分達が狙われたのだらう。

そして自分にとって最後の家族である祖母も先程没した、その事実  
に涙が溢れた。

「おばあちゃんが言ってたっけな、男が泣いていいのは為すべき事を為した時だつて」

自身に言い聞かせるかのように祖母が言っていた格言を呟く。今ここで崩れてはいけないのだ、犠牲になった者達の為遊徒は戦わなくてはいけない。たとえいくら傷つこうが死にそうになるうが決して曲げないと決めたそれが遊徒の覚悟なのだから。

「まずは……シグナーとなりえる者達を確認、だな」

遊徒はホイールを加速させた。

目指すのはそれぞれのシグナーがいる場所。

彼らが守るに相応しい存在か判別するために遊徒は走る……のだが。

「まずはあいつを黙らせるか……」

「待て！ そのDホイール、夜間のDホイールでの走行は禁じら

れている。あーもういちいち罪状言つの面倒だから逮捕だあああ  
！」

（こいつ……本当に公務員か？）

「おい、あんた」

「ああ？」

「デュエルしろよ、あんたもデュエリストなんだろう？ だったら俺が  
勝ったら俺を見逃せ、負けたら捕まったって文句は言わんさ」

「ハッ、餓鬼の癖にいい度胸だ。いいぜえ、相手をしてやんよ！」

「勝負形式はスタンディングだ。……行くぞ！」

「ああ、良いだろう」

「「決闘！」」

「先攻は頂くぜえ、ドロー！ 俺はアサルトガンドッグを守備表示で  
召喚！ カードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー。俺は聖騎士<sup>セイントナイト</sup>パラディン ウルクを召喚、そ  
して効果を発動デッキからレベル4以下の聖騎士<sup>セイントナイト</sup>と名の付いたモン  
スター一体を手札に加える。俺は聖騎士マージ シトラスを手札に  
加える。更に手札から装備魔法《雷の双剣 アルス》を装備！ こ  
のカードは聖騎士と名の付いた風属性モンスターにのみ装備可能だ。  
バトル！ ウルクでアサルトガンドッグを攻撃！ ツインエッジ！」

聖騎士パラディン    ウルクATK/DEF1600/1400    2  
100/1900

双剣を持った騎士がアサルトガンドッグへ攻撃し切り裂いた。  
が、切り裂いた筈のアサルトガンドッグがそこには居た。

「ハハハ、残念だったなあ。アサルトガンドッグが戦闘破壊された  
時別のアサルトガンドッグをデッキから呼び出すんだよ！」

「残念なのは貴様の方だ、雷の双剣    アルスの効果、このカードを  
装備したモンスターは一ターンに二度攻撃できる。ツインエッジ・  
セカンド！」

牛尾LP4000    3100

「チッ、もう一体アサルトガンドッグを特殊召喚だ」

再び現われるアサルトガンドッグ、遊徒はカードを2枚伏せてター  
ンエンドした。

次の牛尾のターン、牛尾はアサルトガンドッグをリリースしてレベ  
ル5、ワッパードラゴンを召喚した。

「さらに魔法カード大嵐を発動！    テメエの装備魔法を墓地へ送っ  
てもらうぜ！ワッパードラゴンでウルクに攻撃！」

遊徒LP4000    3900

「ハッ、大口叩いた割には口ほどにもないじゃねえか。その聖騎士  
とか言う奴もなあ」

牛尾は知らない、その発言は決して遊徒に言ってはいけない事を。



そしてこれから自らに降りかかる不幸を。

「……叩き潰す」

「は？」

「俺は魔法カード、《二重召喚》を発動。そして手札からチューナモンスター、《疾走の刻印》を召喚！効果を発動、墓地に存在するレベル4以下の聖騎士と名の付いたモンスター一体を特殊召喚する。更に聖騎士マージ シトラスを召喚する。デッキから《疾風の槍 ブレイザー》を手札に加える。レベル4聖騎士パラディン ウルクにレベル2疾走の刻印をチューニング！」

疾走の刻印が二つの輪となりウルクをくぐらせる。

輪を通過したウルクは四つの星となる。「集いし星が新たな騎士を呼び覚ます、光守護する騎士となれ！シンクロ召喚！救済せよ、<sup>セイ</sup>聖騎士<sup>セントナイト</sup>メシア ウルク！」

現われたのは先ほどフィールドに居た聖騎士ウルクに似た新たなる騎士、救世主<sup>メシア</sup>の名前を冠した遊徒の相棒だ。

ちなみに効果も凶悪至極。

「へっ、シンクロ召喚とは驚いたが……さっさとご退場願おうか！伏せカードオープン、サンダーブレイク！コストとして手札を一枚墓地へ送りウルクを破壊だあ！ 所詮権力には逆らえないんだよ！」

高笑いする牛尾だが、煙が晴れるとそこには無傷で立っているウルクの姿。

牛尾は一瞬呆然とし、遊徒はニヤリと笑って効果を説明した。「聖

騎士メシア ウルクは魔法・畏・モンスター効果の対象に選ばれた時手札を一枚墓地へ送る事でその効果を無効にする事が出来る。さてと、これで終わりにさせてもらおう。俺は《疾風の槍 ブレイザー》をウルクに装備！ 更にシトラスに《光の錫杖 アルティア》を装備！」

ウルク ATK / DEF 2600 / 1800 3300 / 2500

シトラス ATK / DEF 1500 / 1200 1900 / 1600

「攻撃力3300だと……！？」

（だが俺の伏せカードはガードブロック、このターンは乗りきれる！）

「シトラスでワッパードラゴンに攻撃！マジックイリジェクション！」  
牛尾 LP 3100 3000

（この攻撃を受けちゃったら終わりだがガードブロックがあれば……）

「光の錫杖 アルティアの効果発動、装備モンスターが相手モンスターを破壊したとき相手場上の魔法・畏カードを一枚破壊する、ホーリースパーク！」

「何いッ！？」

「これで終わりだ！ ウルクでダイレクトアタック！ サンクチャリ・ドライブ！」

牛尾LP3000 0

「くそッ、俺が負けるとはな……」

「お婆ちゃんが言ってたよ、弱き者を害する者こそが最も弱き者だ  
ってね」

「へん、そつだよ。俺は人をいびる事しか出来ねえ小物だよ」

「だが……こうとも言っていた」

「あ？」

「自らの弱さを認められる者は更なる進化を遂げられる、とな。自  
分の弱さを認められるあんたはもつと強くなれるさ」

僅かに笑った遊徒はDホイールに乗ると静かに走り出す。

「おい、ちよつと待て」

「ん？」

「こいつを持ってけ」

そう言つてホイールに転送されてきたのは治安維持局のパトロール  
のタイムテーブルだ。遊徒は驚いた、これは治安維持局からすれば  
機密データだ。

こんな物を渡したとなればもしバレた時牛尾のクビは一発で決まっ  
てしまつだろう。

「……良いのか？」

「ハッ、ガキはガキらしく大人の好意を受け取っておきな」

「そうか、感謝する」

「他の奴らに捕まるんじゃないぞ」

「分かっているさ」

今度こそ遊徒は走り出した。

まず向かうのは 絶対王者ことジャック・アトラスのもとだ。

とあるマンションの一室、そこにジャックは居た。手元には彼の好<sup>ラ</sup>敵手であるシンクロモンスター、《スターダストドラゴン》のカードがある。

そんな時彼の右腕にあるドラゴン・ウイングの痣が僅かに疼いた。

「なんだ……？」

翼を象るその痣が何かに呼応している。ジャックの経験上このような事は一度もなかった、治安維持局長官、レクス・ゴドウィンはこの痣を星に選ばれし者、と呼んでいたがジャックとしてははらわたが煮えくり返る思いである。今でこそ絶対王者と名を馳せているがかつてジャックはサテライトで生まれた。公的にはシティのトップス生まれとされているがそれはゴドウィン達が作り上げた真っ赤な偽物の経歴。更なるステージへの進化の為にシティに來たがそこに

居たのは雑魚ばかり。中にはそれなりの決闘者は居たがそれでも格下の者ばかり。

そんな状況に彼は満足出来ていなかった、唯一彼を満足させる事が出来る人物はおそらくサテライトから既にこのシティに潜り込んでいるだろうが自らと戦う迄に少しばかりの時間を要するだろう。

そんな時間に彼の荒ぶる魂は不満を噴出させていた。

暇潰しにちょうどいい決闘者も居ない分だけ不満に拍車をかけていた。そんな時、彼の後ろに微かな気配が現れた。

「……誰だ、貴様は？」

「キング、ジャック・アトラス。实力を見せてもらおう」

黒いライディングスーツにサングラスをかけた18、9歳程度の男、  
光 遊徒は絶対王者に勝負を挑む。

## Second turn・王者

ジャック・アトラスは自身の部屋に突然現れた男を睨み付けていた。

「貴様、なんのつもりだ。いきなり現れてデュエルとは」

「別に、ただキングと言われる人の实力を知りたいから来ただけだよ」

遊徒の表情は暗がりではジャックからは読み取りにくかったが彼は笑っていた。

ジャックから感じる王としての風格、その鋭い気配、まさしく遊徒が求める資質だ。

彼の腕にあるドラゴンウイングの痣はその強き力で敵を薙ぎ払う事を顕わしている、ジャックはその痣に相応しい男だろう。

遊徒は彼をシグナーとして認められるものだと感じ取った。認められるがそれゆえに。

（ああ、戦ってみたいよ。デュエリスト 決闘者として、キング 絶対王者と戦いたい！）

「フン、貴様などに試されるのはシャクだが……フォーチュンカッブまでの前座として相手をしてやろう」

ジャックは近くに置いてあった決闘盤を手に取り腰にあるデッキポーチから自らのデッキを取りだしディスクにセットする。  
それに応じて遊徒もディスクを構える。

「「決闘！」」

「俺の先攻、ドロー！俺は《ランサーデーモン》を攻撃表示で召喚、カードを二枚伏せてターンエンドだ。……貴様のターンだ、この俺にこのような振る舞いをしたあげく挑戦事を後悔させてやろう」

【ジャック：LP4000 手札：三枚 モンスター：ランサーデーモン 伏せ：二枚】

「言っておくが、男に必要なのは99%の努力と1%の決断、大事なのはそうやって選んだ自らの道だ。俺自身が選んだ道を俺が後悔するはずが無い、俺自身が決断したことだからな」

「ならばその決断ごと叩き潰してくれる！」

「させないさ……俺のターン！俺は《セイントナイト聖騎士ソードマン ザルウエ》を召喚、効果を発動！召喚時手札を一枚墓地に送り相手場上に存在するカード一枚を墓地に送る、ダークヴァニッシュ！」

聖騎士ソードマン ザルウエ 4

ATK1600

DEF1400

効果

このカードはフィールド上に存在する限り罠の効果を受け付けないこのカードは召還、特殊召還に成功した時手札を一枚墓地に送ることで相手フィールド上に存在するカードを一枚破壊する。

闇を纏った剣の一閃がジャックの伏せカードを破壊した。

しかし、ランサーデーモンの攻撃力はザルウエと同じ、このまま攻撃したところで相打ちになるだけだ。

だが、幸いな事に遊徒の手札にはそれをどうにかする魔法カードがある。

「俺は装備魔法《闇の妖刀 破邪》を発動！このカードをザルウ

エに装備、このカードを装備したモンスターは攻撃力が1000ポイントアップする。ザルウエでランサーデーモンを攻撃、破邪一閃！」

ザルウエに漆黒の闇を纏った剣を一文字に振るわれたランサーデーモンは悲鳴と共に消えていった。

「何ッ、除外されただとッ!？」

「《闇の妖刀 破邪》の効果だ、このカードを装備したモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時そのモンスターを除外する!」

「チッ、小癪な……」

ジャックLP4000 3000

「カードを一枚伏せてターンエンド」

【遊徒：LP4000 手札：三枚 モンスター：聖騎士ソードマン ザルウエ 魔法・罫：闇の妖刀 破邪、伏せ一枚】

「キングは……キングは負けん! 俺のターン! このモンスターは相手場上にのみモンスターが存在する場合特殊召喚することができる。《バイスドラゴン》を特殊召喚! 更に《ダークリゾネーター》を通常召喚!」

現れたのは小悪魔のようなモンスター、右手には音叉、左手には棒を持っている。

そしてこのモンスターはジャックの魂と呼ぶべきモンスターを呼ぶための鍵だ。



「……キングを侮辱し、一撃入れた貴様にキングの魂を見せてやるう、バイスドラゴンにダークリゾネーターをチューニング!」  
バイスドラゴンに音叉を鳴らしたダークリゾネーターが変化した3つの輪が包み込みバイスドラゴンが5つの星に変わる。現れたるは紅き悪魔の名を冠するドラゴン、そしてジャックのシグナーのドラゴンだ。

「王者の鼓動今ここに列を為す、天地鳴動の力を見るがいい! シンクロ召喚! 我が魂、《レッドデーモンズドラゴン》!」

現れたのは紅き悪魔の名を冠した力強き龍、その力強さに遊徒は笑った。

自身が持つカードを含め全部で七枚存在するシグナーのドラゴンのカード、そのうちの一枚が目の前に現れたということにどうしても高揚してしまう。

「だが、俺の場上には伏せカードがある。このまま攻撃したらレッドデーモンズが迎撃されるかもしれないぜ?」

「フン、そのようなこと分かっているわ。だが……キングを舐めるな! 魔法カード発動、《クリムゾン・ヘル・セキユア》! このカードの効果で貴様の魔法・罠カードを全て破壊する!」

「なっ!? ならチェインして罠カード発動、威嚇する咆哮! このターンあなたは攻撃宣言できない!」

【ジャック：LP3000 モンスター：レッドデーモンズドラゴン 伏せ：二枚 手札：一枚】

「チッ、ターンエンド!」

「俺のターン、俺は《セイントナイト聖騎士アーチャー アイヴィス》を召喚！ターンエンド」

【遊徒：手札三枚 モンスター：ザルウエ、アイヴィス】

「フン、攻撃力ただか800のモンスターを攻撃表示で出すか、愚かな。レッドデーモンズでアイヴィスを攻撃、灼熱のクリムゾンヘルフレア！」

「アイヴィスの効果を発動！800ライフを支払うことで戦闘を無効にする！」

アイヴィスから放たれる青い魔力がレッドデーモンズドラゴンの焰を防ぎきる、ある程度の衝撃はあったがそれでも遊徒は絶対王者のキング攻撃の衝撃を受け止めきった。

遊徒LP4000 3200

「フン、雑魚は雑魚らしく小賢しい手を使うか」

「小賢しくてもただの力押しよりかはマシだ。俺のターン、手札から魔法カード《聖騎士召集》を発動！場上に聖騎士と名の付いたモンスターが存在する時手札から聖騎士を一体特殊召喚出来る。俺は《聖騎士の従者》を特殊召喚！」

現れたのは身軽な軽装の男性、だが一般的な男性に見えるその表情は鷹のように鋭い。

「聖騎士の従者は召喚、特殊召喚に成功したとき場上に存在するこのカード以外の聖騎士が装備出来る装備魔法をデッキから手札に加

えることが出来る。俺はデッキから《氷結の弓 ボレアス》を手札に加える」

「更にチューナーモンスター、《疾走の刻印》を召喚！効果により墓地から《聖騎士パラディン ウルク》を特殊召喚、効果を発動！

デッキからレベル4以下の聖騎士を手札に加える！」

手札に加えるのは《聖騎士マージ シトラス》。

このターン既に通常召喚権は既に使っているのでシトラスは召喚出来ないが遊徒は特に構わなかった。重要なのは今から呼び出すモンスターだ。

「レベル3の聖騎士アーチャー アイヴィスと聖騎士の従者にレベル2、疾走の刻印をチューニング！」

呼び出すのは遊徒にとって奥の手のようなモンスター、ジャックは彼の魂であるレッドデーモンズを出してくれた。ならば遊徒もそれに応じて朋友（仲間）を呼び出す。

「レッドデーモンズと同じレベル8シンクロモンスターだと！？」

「集いし誇りが新たな騎士を呼び起こす、光守護する騎士となれ！

シンクロ召喚！ 騎士の誉れを具現せよ、《セイントナイツドラゴン》！」

現れたのは騎士のごとき誇りと風格を纏った龍、その姿は筆舌に尽くしがたい。

形状は例えるならスターダストドラゴンに近いだろう、だが細部はかなり違っている。腕は何かしらを扱うのかスターダストドラゴンより発達している。

「更に俺は手札から装備魔法《氷結の弓 ボレアス》を発動！ このカードは自分場上に存在する水属性の聖騎士にのみ装備出来る」

「だが貴様の場には水属性の聖騎士は存在しない、無駄骨だったな」  
「いや、セイントナイトドラゴンは全ての装備魔法を装備出来る効果を持っている！ その効果でボレアスをセイントナイトドラゴンに装備！」

セイントナイトドラゴン ATK / DEF 2500 / 2100 29  
00 / 2500

「何だとツ！？だが、それでも我がレッドデーモンズには今一歩及ばんなあ！」

「セイントナイトドラゴンでレッドデーモンズに攻撃！アクアラインシュート！」

遊徒 LP 3200 3100

「貴様……何のつもりだツ！」

「こういうつもりだ、速攻魔法発動、シンクロバースト同調炸裂！ このカードは自分シンクロモンスターが戦闘を行い攻撃対象が破壊されなかった時メインフェイズ2に発動出来る。そのモンスターを破壊する！」

「何ッ！？ レッドデーモンズが破壊されるだ！？」

ジャックのレッドデーモンズが破壊され場はがら空になる。  
遊徒の場にはザルウェとセイントナイトの二体が残っている。

「俺の……タアアアンツ!!」

ジャックが力強く引いたドロカード、そのカードは……《天よりの宝札》、手札補充としては最高のカードだ。

「俺は魔法発動、天よりの宝札を発動! デッキから手札が六枚になるようお互いのプレイヤーはドロする」

(ここでドロ加速するか……見事な引きだ。ん?)

遊徒はふと遠くから人が接近する気配を感じ取った。

その気配を感じ取った遊徒の行動は早かった、カードを素早くまとめ立ち去ろうとする。

「貴様……キングとのデュエルを放り出してどこに行くつもりだッ!?!」

「悪いが邪魔が入ったからな失礼させてもらおう」

遊徒はそれだけ言い残すと霞に消えるがごとくその場から立ち去った。

後に残されたジャックは逃げられた怒りを込めてか壁を殴り付けた、キングとなつてからこのような屈辱は受けたことがなかった。途中でデュエルを放り出すこともあのような無礼なデュエルを挑まれる事も。

その屈辱にジャックは打ち震えていた、そしてそれは唐突に収まった。

2ヶ月後に開催されるフォーチュンカップ、あれほどの腕なら大会に出場するだろうと言う思考がジャックの頭をよぎった。

そのジャック(キング)の目が獲物を見つけたが如く苛烈に輝く。

絶対王者に不逞を働いた輩を叩き潰すという覚悟をその胸に秘めて。

## Second turn・王者（後書き）

今日の注目カード

《レッド・デーモンス・ドラゴン》

《シンクロ・効果モンスター 星8/闇属性/ドラゴン族/攻3000/守2000 チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上》

このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。 このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、 このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上の このカード以外のモンスターを全て破壊する。

遊戯王5d'sにおいて主人公のライバルであるジャック・アトラスが使用するモンスター。

ジャックはこのモンスターを我が魂と呼ぶほど愛用している、リク・ルーターに強く《マシュマロン》や《魂を削る死霊》を簡単に除去出来る。

ただし二つ目の効果はデメリットになりうるので注意が必要。

攻撃力が3000と非常に高いのでアタッカーに最適。ビートダウンデッキならば切り札になりうる。更に名前に《デーモン》が入っているのでそちらにも応用できる。

と言うことで今回はジャック編でした。

デュエルが単調ですいません；

次回はどのシグナーの元に行くのか、楽しみにしてお待ちください。  
それではノシ



### Third turn・守護

「……………むう」

ネオ童実野シティのとある一角にて遊徒は悩んでいた。

彼は影のシグナーとして赤き龍の痣を持つ者達を護ることを使命としている。十数日程前、最初のシグナー、ジャック・アトラスとデユエルし、彼が守護するに足るシグナーと理解した、後残るは五名のシグナー。遊徒はそのシグナー達がどのような人相をしているかは知っているがどんな名前などかは知らない……………。

一人一人の顔を思い出してあることに気付いた。

ドラゴンハートのシグナーとドラゴンレッグのシグナーの顔立ちが似ていたのだ。

（やれやれ、俺としたことがこんな事に気付かないなんてな）

年頃も近いのでおそらく兄妹だろう。それならばこの二人に接触するのが合理的だろうと思う。

ただし居場所は知らないので探し回る事にはなるだろうから治安維持局にある住民データにハッキングしなければならぬだろうが。非常に面倒臭いが仕方あるまい。

家を出る際持ち出した荷物からノートパソコンを取り出しハッキングを開始する。このパソコンは遊徒のD・ホイールを作った人物が作った物で、小型ながらも高性能で動力源もディスクから供給可能と言う既にパソコンを超えてる気がしてならないのだ。

「ん？」

（サテライトから脱出した人物が居る？名前は不動遊星……………顔写真

つきか、ってこいつは!?)

写真にあったのはドラゴンヘッドに選ばれた青年だった。

因みに余談だが今彼の腕にある痣はドラゴンテイルの痣だ、先代ドラゴンヘッドのシグナーから痣は消えていないが消えるのは時間の問題だろう。

そうして消えた瞬間に彼、不動遊星の腕にドラゴンヘッドの痣は現われるだろう。

「……っと、さつさと住民票のデータにアクセスしないとな」

素早くプロテクトを破り住民のデータを閲覧していく、サテライト、シティの順に閲覧していくがデータは出てこない、その事実には遊徒は舌打ちした。

ここまで閲覧しても出てこないというのなら後に残るは最上級層が住むトップスのみ。

トップスのデータを閲覧するのはいくら高性能なこのパソコンでも無理があるだろう。

(頼りたくは無いが……仕方ない、相談しに行くか)

D・ホイールに乗りその知り合いの元へ走る、遊徒の表情は苦々しさで一杯だったが。

「……それで、来た?」

「ああ、頼めるか？」

「……クスクシエ、プリン、四十個」

「グッ、出費は高いが、頼む」

シティの郊外にあるとある一軒家で遊徒はとある少女と話をしていた。

遊徒より身長が三十センチほど小さいが実は遊徒より五つ年上の23歳、自らが開発したものを劣化させて販売、その売り上げで生活している。

ちなみに開発は気が乗った時しかやらないらしい、それ以外の時はネット小説を読んだりネットサーフィン等自堕落な生活を送っている。

「ちなみに最近、神崎はやてさん、が書いてる、魔法少女リリカルなのは the rule of gods が、マイブーム」

「……人の心を読むな、お前がこれ以上バケモノになったら俺の胃腸が壊れる」

「バケモノに、なっても、その程度、驚き、バラしても、良い？」

「ダメに決まってるだろ、いいから早くやってくれ」

「実は、既に、終わって、いたり」

「殴るぞ、お前！？」

とりあえずプリンの代金を置き情報を持って外に出る。

シグナーの二人の名前は龍亞と龍可と言うらしい、トップスにあるホテルに現在二人で住んでいるらしい。

あそこに忍び込むのは困難だが出来ないと言うことは無い。

そんな時遊徒はある事に気付いた、二人の情報が私生活にまで及んでいるのだ。

「……この子達がシグナーだと気付いているのか、ゴドウィン長官は」

だとすればゴドウィンはイリアステルの一員と言うことになる。イリアステルの更に奥に潜む三皇帝と呼ばれる人物達、遊徒もよくは知らないが彼らは何かをしようとしているらしい。

星の民と呼ばれる前シグナー達にも関わっているらしいが情報が少ないので遊徒は詳しくは知らない。

「ま、今のところ関係無いか」

とりあえず万能な祖母のお陰か遊徒はトップスに忍び込むルートを知っている。

ついでに電子キーのピッキング方法も、彼は祖母に必要と称されて無駄な知識を保有しているが遊徒（本人）はそれが無駄な知識とは知らない。

それはともかく遊徒は常用している複数のルートの内久しく使っておらず警備が甘い箇所に入ろうと思うがある事に気付いた。

かなり大きな穴がシティとトップスの壁の間に空いているのだ。簡易的に立ち入り禁止の立て札があるがぶっちゃけ無いも同然だ。

周囲は特に監視されているわけでもなく警備も無いようだ。

「……壁があるなら殴って壊すと某アニキが言っていたが本当に壊すやつが居るとは」

穴があるならわざわざ隠しルートを使う義理も無いのでそこから侵入させてもらつ事にする。

「……そう言えば今晚の宿はどうしよう?」

差し迫った問題があるが遊徒は放っておく事にした、面倒臭いから。

一時間後……

遊徒はトップス内の公園のベンチに居た。

下手に接触しても怪しまれるだけなのでここに待機しているのだ。

(まあ……あの二人ほとんど外出しないらしいから半ば賭けだよな)

「おい、クソガキ。俺のズボンに何してくれてんだよ!? アアツ?」

「……トップス内にもああいう輩は居るんだな、ってあの子達は」

絡まれているのはシグナーの兄妹の男の子の方だ。

あのままでは怪我を負う可能性もあるので放っておく訳には行かない。

というよりは放っておくのは遊徒の信条に反する。なので遊徒は絡

んでいる不良にとてとてと近付いていく。

「ハイハイ、そこまでにしようねお兄さん達」

「ああ？なんだてめえ……………ばッ！？」

「通りすがりの決闘者だ、覚えなくていい」

五人居る不良の内一番手前にいた奴　面倒臭いから手前からA  
BCDEと称するが　Aを投げ飛ばしてみると周囲の不良は仲  
間がやられて一瞬呆然としたがすぐに気を取り直してこちらに喧嘩  
を売ってきた。

「おい、てめえ何してくれやがる！？俺たちが誰だか知って喧嘩売  
ってるのか！！」

「いや、お前達が誰かなんて知らん。だいたいほんの十歳位の子供  
に難癖つけてるクズなんて知っただけ無駄だ」

「な……………おい、やっちなえ！！」

周囲を不良達に取り囲み襲いかかってくる。  
が、最初の不良のように吹き飛ばされる。

「光流柔術、逆撫つと」

「うおおおおおおッ！？」

次々投げ飛ばしていき気が付くと周囲には不良の山が築かれていた。

（参ったな……………ここまで暴れるつもりは無かったんだが）

この不良達が妙に根性があり、倒しても倒しても起き上がってくるのだ、遊徒としては某死徒再生を思い出してしまった。

「うーん、どうしようか、この不良共」

「ががが……………」

「ところで君たちは大丈夫か？」

「あ…………はい、助けて頂いてありがとうございます」

「君は？」

シグナーの子の方を向くとももの凄くきらきらした目で見られた。  
一瞬茫然とした遊徒は気を取り直して確認してみると特に怪我もないようだった。

「良かった…………傷はないみたいだな」

「すつげえー！すつごいよ、あんた！あんな動きする人初めて見た！」

「ま、まあ、鍛えてますから」

某鬼のようなセリフを吐きつつ遊徒は内心想った。ライフストリームは何でこの子を選んだんだろう、と。  
ライフストリームの選択を疑うつもりはないが正直言ってこの少年がこれから待ちうる戦いに堪えられるかどうかは微妙なところだろう。少なくとも力にあがれている今は。

そんな遊徒の内心とは裏腹に龍亞は相変わらず凄いと言い続けている。

そこにもう一人龍亞に似た少女、龍可がやってきた。龍亞の周りに転がる不良達に顔を青くして急いで駆け寄ってきた。

「龍亞！これいったいどうしたの！？」

「へっへーん、俺たちが絡まれてるところをさこの人が助けてくれたんだよ」

（なぜに君が自慢げに言うんだ・・・？）

「何で龍亞が自慢げに言うのよ？それより、お礼はちゃんとやったの？言っていないならさっさと言ったらどうなのよ？」

「る、龍可に言われなくなっただけでやるさ！助けてくれてありがとな！」

「ん、別に構わないよ。人助けは当然の事だからね」

遊徒にとって困っている人を助けるのは当然のことだ、まあ助けるに値しない者は見捨てるが。

「はあ、龍亞もこの人ぐらいには大人になって欲しいわね」

「な、龍可だってそうだよ！」

「ちょっと、それどういう意味よ！？」

「だってそうだよ！いつも少し失敗しただけで文句言ってくるし正直言っただけでいいんだよ！」



「……………！」

「それにいつも俺じゃなくて精霊の話ばかり信用するくせに！」

「……………龍亞のバカ！」

龍可はそう叫ぶと踵を返して走り去る。

龍亞も龍亞で呆然としている、遊徒から見ると龍可があれほど怒っているのを初めて見るのだろう。

「……………追わないのか？」

「龍可が悪いんだよ、いつも俺が悪いって言って……………龍可は俺の事が嫌いなんだ」

呟く言葉とは裏腹に龍亞の表情は暗い。

おそらく龍可に言ったことを後悔しているのだろう、遊徒としては後悔するなら最初から言うなと言いたいのだが。

「龍亞、あの……………」

「哲平、今日は帰ってくれよ。一人になりたいんだ」

「え、あ、うん……………わかった。またね……………」

「お兄さんもどっか行ってよ。一人になりたいんだ」

「やだね」

龍亞の頼みをすっぱり断りつつ遊徒は龍亞が座り込んでいるベンチに腰掛ける。

「君が悪気なくあんな事を言っていないってのは分かる。……………何があつた？」

「……………お兄さんはさ、デュエルモンスターの精霊って信じる？」

「居るかどうかはともかく……………龍可ちゃんには見えるんだな？」

「何で分かったの？」

龍亞が驚いたように此方を見上げてくる。遊徒からしたら簡単なことだ。先程龍亞が言った「精霊の話ばかり信用するくせに」と言う言葉があつたからなのだが。

「……………龍可ってさ昔から体が少し弱いんだ。それで俺が守らなきゃって思ってるんだ、だけど龍可がいつも精霊の話ばかり聞くからイライラして必要ない事まで言っちゃって、それで喧嘩しちゃうんだ」

「そうか……………だがな龍亞、そうやって喧嘩出来るってのは良いことなんだぞ？」

「え？」

「喧嘩できるって事は相手を思いやれるって事なんだ。それに……………龍可ちゃんはまだ生きているだろう？ならこれから沢山喧嘩して喧嘩の数だけ仲直りすればいいさ」

「そんなに簡単に出来たら苦労しないよ、俺、龍可を守らなきゃいけないのに困らせてるだけだ」

「それを理解出来てるだけ良いじゃないか、それを理解出来ていないバカ共が世の中には沢山居るさ」

「ねえ、お兄さんにも妹が居たの？」

「……………どうしてそう思った」

「さっき生きているだろう、って言ってたでしょ。それでなんとなく」

子供故に直感が優れているのだろうか、龍亞はただなんとなくいう自身の直感だけで遊徒の過去を一端を言い当てた。

「ああ、妹が居た。…………十年前に死んだけどな」

「あ……………ごめんなさい」

「構わないさ、ただ……………伸ばした手が届かなかった事は辛いけどな」

「え、最後何か言った？」

「いや、何も言っていないさ。龍亞、よく考えろ、答えは常に手が届くところにある」

それだけ言つと遊徒は立ち上がった。

龍可を探しにいくのだ、この二人は良くも悪くも対照的だ。

片方だけ問題を解決しても意味はない、お互いが納得出来る答えを見つけてやる必要があるだろう。その為に遊徒は歩き始めた。

「……………」

「……………こんなところに居たのか」

「あ、さっきの……………」

「光 遊徒だ。ただのおせっかいだから覚えなくていい」

「あ、さっきは二人を助けて頂いてありがとうございました。それで何かご用ですか？」

「なに、ただのお節介だよ」

龍可が居たのは先程の公園から少し離れたトップスの喫茶、翠屋と言うところだ。

龍可のお気に入りのお店と言うことを龍亞から聞いて来たのだがやはりここに居たらしい。

「隣、良いか？」

「あ、はい。どうぞ」

「……………君は何であの時怒ったんだ？」

やっぱりか、と言う顔で龍可はうつむいた。

遊徒は何も言わず龍可が言い出すのを待っている。

沈黙が場を包むが遊徒は構わず呑気にもチョコパフェを注文していた、その呑気さに龍可は思わずずっこけてしまう。

「もう良いです、私の話を聞く気なんてないでしょう?」

「ん? 聞くつもりはあるよ、けど君が話すまで待つつもりなんだけど話す気になった?」

「考えるのが馬鹿らしくなって来たのでもう話しますよ……………龍亞は昔から私を守ってくれてたんです。だけど、龍亞ってあの性格でしょ? それでいっつも色んな事に目移りがちで、それで今日の龍亞の言葉にイラッて来ちゃってそれで……………」

龍可は自身が言った言葉に後悔しているのか、俯いてしまう。

それともう一つ龍亞が言った精霊ばかりと言う言葉が意外と凶星だったらしくそれも関係しているらしい。

シグナーと言うがこうしていればただの十歳の少女だ、傷つくこともあるし悩みだってあるだろう。

「そんなに悔やんでいるなら謝ればいいに」

「そんなに簡単に出来たら苦労しません!」

「……………ぷっ、あはははは!」

「な、何で笑うんですか!」

「いや、やっぱり君たち二人は兄妹なんだなってさ」

「え? え?」

遊徒の発言の意味が理解出来ないのか龍可は頭を左右に助けを求めるかのように巡らしている。

「龍亞もな、君と同じ事を言っただよ。簡単に仲直り出来たら苦労しないって」

「龍亞がそんなことを……………」

「君たち二人は仲が良い兄妹なんだろうな、けどだからこそ君たちはお互いが理解できない部分が出てくるんだと思う。人は利己的でね、己が理解できない物を排除しようとする習性があるんだよ。だからこそ君たちはよく話し合っ解決策を模索しなければならぬ」

そう言って遊徒はある方向を指差す。

そちらを龍可が見ると龍亞が走ってきていた。よっぽど慌てているのかたまにこけそうになっているがそれでもなんとかこけずにここまでたどり着いた……………と思ったらこけてしまった。

「龍亞、大丈夫!？」

「だ、大丈夫。このぐらい平気だよ!　こんぐらい我慢出来なきゃ龍可の事を護ることなんて出来ないよ!」

「え……………」

「俺さ、お兄さんに説教されてからずっと考えてたんだ…………俺、今まで龍可の事を護るって簡単に考えてたんだ。龍可には精霊が居るから俺は要らないって気持ちもあったし龍可は俺よりしっかりしてるから守る必要なんてあるのかって考えたこともある、だから……………」

……………」

「うっん、龍亞！ 私だっていつも龍亞がいろんな物を見ているのを羨ましく思ってたの。だから龍亞が私を護るって言ってるのにいろんな物を見るのが嫌だったの！」

「ま、要するに君たち二人はお互いの良いところや悪いところを見すぎていてそれをコンプレックスに思っていたんだな。だから喧嘩をしてしまうし認められないところが出てくる、それを理解できたから今仲直りできたんだろう？」

「「あ……」」

「ま、無事に仲直りできた二人にプレゼント。ハイ」

二人に渡されたのは四枚のカード、普通の効果モンスターとシンクロモンスターだ。

この二人がシグナーということでデッキの内容は大体想像できる、今渡したカードはそれに投入するのに相応しいカードだ。

「そのカード達が君たちの助けになる事を祈るよ」

「え、でももらって良いんですか」

「そうだよ、このカード達ってお兄さんの絆でしょ、そんなの貰うわけにはいかないよ」

「絆……か、確かにそうだよ。だけど絆はただそこにあるだけじゃない、絆は出会いを生み、出会いが絆を生み出す。その巡り合わせが人の繋がりで。そしてその繋がりは決して絶たれることはない。そんな繋がりを俺は作って行きたいんだ、だからそのカードを君たちに貰って欲しいんだ」

「……………うん、分かったよ遊徒兄ちゃん！ 大事に使わせてもらうよ」

「はい！ 私達の絆として大事にします！」

「よし！ なら俺は帰るから仲良くするんだぞ」

そう言い残し遊徒は二人に別れを告げ立ち去っていった。

「行っちゃったな」

「そうね、でも私達の絆は絶対に切れないわ！」

二人の会話の最中、遊徒が渡したカードがほんの少し光りカードの絵柄が笑った気がした。

二人はそれには気付かなかったが龍可の横にいたクリポンはその光に『クリリッ』と嬉しそうに鳴いていた。

D・ホイールに乗りながら遊徒は思考する。

あの二人は子供の無邪気さを持ちつつ似つかわしくない護りたいと言っ願いをその身に抱え込んでいた。

護り癒す事に特化したエンシェントフェアードラゴンとライフストリームドラゴンのシグナーとして相応しい存在と言えるだろう。



だから遊徒は彼等をシグナーとして、認めた。彼らにはこの先数多の苦難に遇うかもしれない。

だが、あの兄弟ならばお互いを支えあい戦い抜ける。そんな未来図が簡単に予想できて遊徒はクスリと笑った。

### Third turn・守護（後書き）

今回はデュエル無しだったので注目カードは無しです。

ここらでちょっとしたネタバレでも、見たくない人は戻るを押してくださいね。

ということではネタバレです。まあ、詳しくは言いませんが。

無論このシグナー巡りが終わったらフォーチュンカップの時期の話を書き、ダークシグナーの話を書きます。

この時ダークシグナーが使うのは地縛神じゃありません、と言うよりオリジナルの設定として考えている設定をぶちこみます。

何故地縛神は地縛神になり得たのか、そこら辺を描写させていただきます。人の怨念で神が堕ちる訳がありませんし何かしらの要因があったはずですので。

楽しみにして待っていてください。

## Fourth turn・黒羽

「どうする……………」

既にジャック・アトラス、龍亜&龍可兄妹との対話を果たした光遊徒。

現在は3番目のシグナー、オレンジ髪を逆立たせた男の下へ行こうとしているのだが。

「何故だ……………何故、データベースにこの男の情報がないんだ!？」

そう、愛用のパソコンのキーボードに拳を叩きつけ、遊徒は毒づく。治安維持局のデータベースをハッキングすることなど、彼にとつては造作もないことだ。

既にトップスや刑務所を含むシティの全ての人員名簿を閲覧したが、どこにも彼の目的とする男の顔がないのだ。

「考えられるとすれば、サテライトだが……………」肥溜めのような有様のおそこの住人であるならば、治安維持局のデータベースにデータがないのも理解できる。

ならば、すぐにでも行きたいのは山々なのだが。

「参ったな。どうやって行こうか……………」

シティからサテライトへ向かう方法は、ない。

船は出ていないし、道路は繋がっていない。完全なる孤島である。

「どうすれば……………」

考える。何か方法があるはずだ。  
そう、顎に手を当てて考え込んでいると。

「……………っ！？ 邪眼の痣が……………！」

鈍い痛みを感じて、遊徒は腕を押さえた。  
ウジャト眼の紋様が赤く発光し、力を示している。  
そして、響き渡る声。

遊徒。

「その声は！」

遊徒は徐に、デッキホルダーからカードを取り出す。  
シンクロモンスター、セイントナイツ・ドラゴン。  
その高貴なる輝きを放つドラゴンが、幻影のように遊徒の目の前に  
顕現した。

「セイントナイツ、ドラゴン……………」

『久しいな、遊徒よ』

この旅を始める前に出会った、遊徒がシグナーである証。  
その龍が今、彼を見下ろし語りかけていた。

「セイントナイツ・ドラゴン、俺は……………」

『解っている。あの男に会いに行くのだろう？』

「そうなんだ。でも、そこへ行く方法が……………」

『案ずるな。私の力で、お前をそこまで送り届けよう』

「本当か!？」

まさに渡りに船。

遊徒の問いに、セイントナイツ・ドラゴンは頷き

やがて

発光を始めた。

視界を光が塗りつぶし、やがてぐにやりと歪んでいく。

『行くぞ。我らが光の下へ………』

光が完全に消失する。

その時、既に彼らの姿はそこにはなく、ただ伝説の龍の力に揺られた電灯の紐が  
空虚に揺れていた。

「ここは………」

セイントナイツ・ドラゴンの光に飲み込まれた遊徒は、廃墟と化したビルの一室に横たわっていた。

倦怠感を感じる身体を叱咤し、立ち上がって自分の状態を確認する。左腕には、デュエルディスク。カードホルダーには、愛用の聖騎士デッキが入っている。さらに、背中には鞆もあった。ご丁寧に、パソコンなど、遊徒が持っていきたいであろうもの全てがその中に丁

寧に収納されていた。

「親切なことだな」

セイントナイツ・ドラゴンの気遣いに感謝しつつ、階段を探して下へ降りると、そこにはD・ホイールが横付けされていた。

これも、セイントナイツ・ドラゴンが必要だと判断して転移させてくれたのだろうか。

疑問は残ったが、探索の足としてD・ホイールがあるのはありがたい。

数回グリップを捻ってみると、景気のいいエンジン音が返ってきた。デュエルディスクをセットして飛び乗ると、ヘルメットを着けバイザーを降ろす。あの青年はどこにいるのだろうか。

早く見つかることを祈って、遊徒はD・ホイールを走らせた。

「……………しかし、見れば見るほど酷い場所だな。ここは」

辺りを見回しても、見えるのは一面に広がる廃墟ばかり。

この辺りで彩りを持っているのは、今遊徒の乗っているD・ホイールくらいのものだろう。

以前からシティとサテライトとの格差には心を痛めていた遊徒だったが、その現実を今まさに目の当たりとしていることに、胸の締め付けられる思いだった。

と、そんな時だった。けたたましい音が、辺りに響いたのは。

「何だ？」

呟いた、まさにその時。

遊徒の乗るD・ホイールのすぐ目の前を、黒を基調としたD・ホイ

ールが駆け抜けていった。

「ここの住人か……………」

ちようどいい、と思った。

もしかしたら、あの青年の話を聞けるかもしれない。

そう考え、遊徒はそのD・ホイールを追いかけるように、自らのD・ホイールを走らせる。スペックは似たようなものだったのか、遊徒のD・ホイールはやがて、そのD・ホイールと肩を並べることになった。

そうして、遊徒が声をかけようとした、その時。

「ちいつ、新手かよっ!」

「何?」

そう言つて舌打ちすると、黒のD・ホイールはスピードを上げて走り抜けてしまう。

「待つてくれ!」

遊徒も慌ててスロットルを上げ、追いかけた。

しかし、このサテライトはおそらく彼の庭のようなものだろう。差は広がりこそすれ、少しも縮まってはくれなかった。

「ちつ、仕方ない……………」

遊徒は舌打ちすると、強制的にライディングデュエル専用フィールド魔法、スピードワールドを起動させた。



『Duel mode , on . Auto pilot , st  
and by .』

「げっ!？」

2つのD・ホイールで同様の音声が鳴り響き、2人の周囲の景色が色を変える。

スピードワールド。

この魔法に囚われたD・ホイールは、デュエルが終わらない限り互いに離れることは出来ない。セキュリティが犯罪者のデュエリストを捕らえる時に使用する策だが、こんな形で自分が使うことになるとは思わなかった。

以前スクラップ場にて、大破したセキュリティのD・ホイールからパーツを（主に知り合いの変人科学者の指令で）拝借して改造されたことがあったが、今覚えばやらせておいてよかったように思う。

「くそっ、セキュリティかよ!………いいぜ、この鉄砲玉のクロウ様が相手してやらあ!」

どうやら、向こう

名は、クロウというらしい

も、やる気のような。

カードがデッキホルダーにてオートシャッフルされ、カードを5枚引き、準備が整う。

「デュエル!」

高らかに宣言し、デュエルが始まった。

「先攻は譲ってやるよ」

「なら行くぜ、俺のターン！」

カードをドロ―したクロウは、手札のカードを一瞥。そしてすぐさま、1枚を選び取った。

判断の速さは、なかなかのものようだ。

「俺は、B F - 銀盾のミストラルを守備表示で召喚！」

クロウの場に、白銀の盾のような仮面を着けた紺色の羽の鳥モンスターが召喚される。

なるほど、B F           ブラックフェザーを使うデュエリストか。そう理解している間にも、クロウのターンは続く。

「カードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「俺のターン！」

カードをドロ―すると、遊徒もまた、クロウに劣らぬ判断力を見せる。

「セントナイト聖騎士ウォリアー   クラストを召喚！」

蒼く輝くワームホールが開き、そこから斧を担いだ屈強な戦士が現れる。

「クラストの効果発動！   このカードが召喚に成功した時、フィールド上のモンスター1体の表示形式を変更することが出来る！」

クラストが振り下ろした斧から、衝撃波が発生し、銀盾のミストラルに直撃し守備表示から攻撃表示に変更された。

銀盾のミストラルは守備力こそ1800とクラストと互角だが、攻撃力は100と貧弱。

攻撃が通れば、大ダメージは避けられない。

「げえっ！？ ミストラルが攻撃表示に！？」大仰に驚くクロウ。それに僅かに口元を緩めると、遊徒はバトルフェイズに入る。

「いくぞ。聖騎士<sup>セイントナイト</sup>ウォリアー クラストで、銀盾のミストラルを攻撃！」

遊徒が命じると同時に、掛け声を上げてクラストが飛び上がる。同時に、両手で振り上げた斧を 落下と同時に、振り下ろした。

「……ちっ、畏<sup>ヒヤッ</sup>発動！ ブラックダメージアウト！」

トラバサミの罠から解放され飛び立つBFの絵柄が描かれたカードが表になり、発光する。

「このカードは、自分の場にBFが一体以上存在する時のみ発動！場のBF1体への攻撃を1度だけ無効にする！」

カードの効果が発動し、クラストと銀盾のミストラルとの間に割り込むように紫色をした半透明の障壁が発生する。

クラストの斧はその障壁に阻まれ、銀盾のミストラルを攻撃の脅威から守った。

「ふう……………危ねえ危ねえ」

「やるな。…………カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

伏せ状態のカードが1瞬現れて消え、遊徒のターンが終了した。続いては、クロウのターンである。

「俺のターン！」

クロウのターンに移り、スピードカウンターが増える。今は互いに2。まだ、スピードスペルの打ち合いが始まる数ではない。

「俺は、BF - 黒槍のブラストを攻撃表示で特殊召喚！」

クロウの場に、螺旋状のジャベリンを構えた黒い羽の鳥人が現れた。攻撃力は1700。ブラストのそれを、僅かに上回る。しかし、遊徒が着目したのはそこではなかった。

「特殊召喚だ？」

黒槍のブラストのレベルは4。通常召喚で出てきてもおかしくない数値。しかし、彼は確かに特殊召喚と言った。やはり、あのカードの効果か。

「黒槍のブラストは、場に他のBFが存在する時、特殊召喚することが出来る！」

「……………なるほど」

そして、場のモンスターのレベル合計は

6！

「シンクロ召喚が来るか!？」

「ご明察だ! レベル4の黒槍のブラストに、レベル2の銀盾のミストラルをチューニング!」

銀盾のミストラルが2つの翡翠色をした円環と化してトンネルのような列を成し、そこへ黒槍のブラストがぐぐり抜ける。

「漆黒の力! 大いなる翼に宿りて、神風を巻き起こせ!」

クロウの詠唱が終わると同時に、円環のトンネルの中に光が満ちる。そして。

「シンクロ召喚! 吹きすさべ、BF・アームズ・ウイング!」

アームズ・ウイング。

黒槍のブラストに似た姿をしたレベル6のBFで、シンクロモンスター。

攻撃力は2300。クラストを上回る上級クラスだ。

「行くぜ! アームズ・ウイングで、クラストに攻撃! ?ブラック・チャージ?!」

槍を構えた鳥人が、翼をはためかせクラストに迫る。

ATK 2300 対 ATK 1600。

クラストは構えた斧ごと粉碎され、破壊されていた。そしてその差、700ポイントが遊徒のライフポイントから引かれる。

遊徒

LP 4000 3300

「うおおおおおっ!？」

決して大きくはないが、無視できない大きさのダメージに、衝撃が遊徒を襲う。

だが、遊徒とてただダメージを受けるばかりではない。

「異発動! ? セイント・エマージェンシー?!」

「げっ、異!？」

「聖騎士と名のつくモンスターが戦闘によって破壊された時、デッキから破壊されたカードとは違う名前の聖騎士1体を、自分の手札・デッキ・墓地のいずれかから特殊召喚出来る! 俺はデッキより、セイントナイト聖騎士 マージ シトラス? を守備表示で召喚!」

現れたのは、聖なる法衣を纏った若い女魔導師。

その壮麗な姿たるや、見る者に神聖さすらも思い描かせる。

守備力は1200。アームズ・ウイングには及ばないが

「俺はこれでターンエンドだ!」

「俺のターン!」

続く遊徒のターン。

これでスピードカウンターは互いに4。

そろそろ動こうかというところで

だった。

先に動いたのは、遊徒

「ドロー!.....俺は、? S p ・エンジェル・バトン? を発動! スピードカウンターが二つ以上ある時、デッキからカードを2枚ド

ローして、その後手札1枚を墓地へ送る！」

デッキからカードを2枚ドロ―。

手札に来たのは、モンスターが1枚。そして、罠が1枚。

どちらも、この戦局には必要なカードだ。

遊徒はさらにエンジェル・バトンの効果で、元々手札にあった4枚の内、モンスター1体を墓地へ捨てた。

「俺はチューナーモンスター、？剛の刻印？を召喚！」

現れたのは、茶色の岩石があしらわれた円盤の形をしたモンスター。

「チューナーだと！？」

「更にシトラスのモンスター効果！ このカードは、全ての属性として扱うことが出来る！ シトラスを風属性として扱い……………？剛の刻印？をチューニングだ！」

剛の刻印のレベルは2。シトラスのレベルは4。

レベル6の シンクロ召喚だ。

「あまねく元素を従えし魔導師が、未来へ続くロードを指し示す！

光守護する騎士となれ！ シンクロ召喚！ 魔導の黎明、？聖騎士<sup>ナイト</sup>ロード シトラス？！」

現れたのは、聖騎士の名を冠する女王。

より艶やかに成長したその姿は女王たるに相応しく、背部に生えた光の翼は大魔導師の証である。

攻撃力、2400。アームズ・ウィングの攻撃力を、辛うじて上回る！

「いくぞ！ シトラスでアームズ・ウイングを攻撃！」

シトラスの構えた杖に先に、虹色の光が収束していく。  
そしてそれを振り下ろし、アームズ・ウイング目掛けて真っ直ぐに打ち出した。

「エレメント・マテリアル！」

迫る光の奔流に、アームズ・ウイングが身構える。  
しかし、クロウの戦術は彼を死なせはしなかった。

「手札から、？BF・月影のカルート？の効果を発動！」

「何！？ 手札から！？」

遊徒は、思わず驚愕の声を上げた。

彼が警戒していたのは、場に伏せられた罠のみ。  
故に、失念していた。手札からの奇襲の可能性を。

「このカードを手札から墓地へ捨てることで、このターン終了時まで、場のBF1体の攻撃力を1400ポイントアップさせる！」

月影のカルートの力がアームズ・ウイングへと宿り、攻撃力が1400ポイント上昇する。

アームズ・ウイングの槍が、エレメント・マテリアルの光条を弾く。  
攻撃力は、月影のカルートの力を得て、3700。その差は歴然だ。

「迎え撃て、アームズ・ウイング！」



アームズ・ウイングが、翼を羽ばたかせてシトラスに襲いかかった。突き出された槍がシトラスを狙う。

が、貫かれる前に虹色の、シャボン玉のような半透明のシールドが出現し、その攻撃からシトラスを守った。

「何だ!？」

「剛の刻印の効果だ。このカードがシンクロ召喚のシンクロ素材として墓地に送られた場合、そのシンクロモンスターは1ターンに1度、戦闘では破壊されない!」

「ちっ、しぶてえ野郎だ!　だが、ダメージはきっちり受けてもらうぜ!」

「ぐおおおおおっ!？」

ATK 3700 対 ATK 2400。

その差1300という大きなダメージが、遊徒を襲う。先程のダメージ、700とは比べ物にならない衝撃に、転倒しないよう必死に耐えた。

遊徒

LP 3300 2000

「くっ、なかなかやるな……………」

なんとか体勢を立て直すことに成功し、そう不敵に笑う遊徒に、クロウもまた笑う。

「ははっ、そういうお前もなかなかじゃねえか。セキュリティにし

「ちゃ、骨のあるやつだ」

「……………は？」

クロウの台詞の中にあつた不可解な言葉に、遊徒は思わず間拔けな声を上げる。

今、この男は何と言つたか。

自分の気のせいではなければ、自分のことをセキュリティと言つた気がするが。

「待て。俺はセキュリティじゃないぞ？」

「嘘付け。強制スピード・ワールド発動させたじゃねえか！」

「あれは、昔ジャンクで見つけたものを修復して、D・ホイールに付けておいただけだ。お前があまりに逃げるから、発動させざるを得なかつたんだろ！」

「そう……………なのか？」きよとん、とした顔で問うクロウだが、頷いてやると急に発の悪そうに頬を掻いた。

「い、いやー……………なんていうか、すまねえな。てつきり、俺を追いかけてきたセキュリティの奴かと……………」

「一体どんな生活送つてるんだ、お前は……………。まあいい。で、どうする？ スピード・ワールドの影響で、デュエルはもう止めることは出来ないが……………」

並走しながら、遊徒はクロウへと問う。

勘違いであることが解つた以上、もうこれ以上戦う必要もないだろう

うが　　。

「決まってるだろ？」

「そうこなくっちゃな。デュエル再開だ！　俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

一旦始まったデュエルである以上、ここで放り出すのは決闘者の恥。それが解っている2人は、スクラップの山の間を縫うように進みながら尚、デュエルを続けた。

「よっしゃ行くぜ！　俺のターン！」

クロウのターン。高らかに宣言しながらカードをドローする。

「？BF - 蒼炎のシユラ？を召喚！」

現れたのは、全身を黒羽が被った大柄な鳥。

攻撃力は1800。レベル4のモンスターとしては、十分にエースクラスだ。

そして　　。

「さらに、手札の？BF - 疾風のゲイル？は、場に他のBFがいる時、特殊召喚出来る！」

小柄で目付きの鋭い、黒羽の鳥が現れた。

さらにこのカードもまた　　チユナーモンスター。

「疾風のゲイルの効果発動！　1ターンに1度、相手モンスターの攻撃力、守備力を半分に出来る！　そして、レベル4の黒槍のブラ

ストに、レベル3の疾風のゲイルをチューニング!」

疾風のゲイルから光が迸り、シトラスの攻撃力が半分の1200まで減少、さらに疾風のゲイルが3つの円環と化し、その中へ黒槍のブラストが入る。

4つの光芒と化したそれは、やがて円環のトンネルの中を光で満たした!

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ! シンクロ召喚! ?  
BF・アーマード・ウイング?!」

現れたのは、黒き甲殻の鎧を身に纏った鳥人。  
攻撃力は、2500。シトラスを大きく上回る!

「いくぜ! アーマード・ウイングで、シトラスを攻撃! ?ブラ  
ック・ハリケーン?!」

シトラスへアーマード・ウイングの攻撃が直撃。  
その攻撃力の差、1300のダメージが遊徒を襲う。

遊徒

LP 2000 700

「くっ……だが、?剛の刻印?をシンクロ素材としてシンクロ召喚したモンスターは1ターンに1度、戦闘では破壊されない!」

「ちっ、しぶといな。けど、2回目は防げるか? アームズ・ウイングで、シトラスを攻撃! 更にアーマード・ウイングの効果で、シトラスには楔力ウンターが乗っているぜ! このカウンターを取り除くことにより、そのモンスターの攻撃力は0になる!」

「何っ……………!？」

先にアーマード・ウイングで攻撃してきたのも、おそらくはこのため。

攻撃力を0にして、一気に勝負を付けようというのだろう。

「畏発動、？ガード・ブロック？！ 戦闘によって発生するプレイヤーへのダメージを無効にし、カードを1枚ドロウする！」

アーマード・ウイングの攻撃がシトラスへ直撃し破壊されるも、ガード・ブロックの効果で衝撃は遊徒へ伝わることはない。  
更にカードをドロウ。このターンは、なんとか凌ぎきった。

「よく躲すな。大した奴だぜ」

「そう簡単にやられてやるほど、俺も柔じゃないんでね！」

不敵に返してみせるが、遊徒の場にはモンスターがいない。  
次に何らかの手を打たねば、負けるのは彼だ。

「楽しいな、こんなデュエルは久しぶりだぜ！ 俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

伏せられたカードが現れて、すぐに消えるクロウの場は万全。  
黒羽の僕は彼と共にあり、見えざる罫は敵の侵入を阻む。

だが、それでも遊徒は臆さない。

むしろ、クロウの言葉に現れているような高揚感すら覚えていた。

「俺のターン！」

運命の、最後のドローは。

「チューナーモンスター、？疾走の刻印？を召喚！」  
勝  
利への、希望！

「？疾走の刻印？の効果を発動！ このカードが召喚に成功した時、墓地からレベル4以下のモンスターを特殊召喚出来る！ 俺は墓地から、シトラスを特殊召喚！」

シンクロモンスターではない、魔導師のシトラスが召喚される。  
さらに。

「罨カード発動！ ？セイント・スターチャージャー？！ 聖騎士と名のつくモンスターの召喚に成功した時、そのモンスターのレベルを2つ上げる！」

星が加わり、シトラスのレベルが2つ上がる。

？疾走の刻印？とのレベル合計は8。レベル8のシンクロ召喚が可能だ。

「レベル6となったシトラスに、レベル2の？疾走の刻印？をチューニング！」  
「レベル8のシンクロ召喚だと！？」

クロウが驚愕する目の前で、シトラスが光と化し、刻印がその身に力を刻む。

「集いし騎士が、新たな騎士を呼び覚ます！ 光守護する騎士となれ！シンクロ召喚！ ？セイントナイツ・ドラゴン？！」

淡く光る、シグナーの痣。

それに呼応して、2つの円環の中にいるシトラスが、一層流麗に輝き  
現れたのは、聖なる光の龍。

攻撃力、2500。遊徒のエースモンスターだ。

「？セイントナイツ・ドラゴン？は、全ての装備魔法を装備するこ  
とが出来る！俺は手札から、？Sp-雷の双剣 アルス？と、？  
Sp-炎の魔銃 レボルス？をセイントナイツ・ドラゴンに装備！」

セイントナイツ・ドラゴンに雷と炎の力が宿り、それぞれ1つにつ  
き500ポイント攻撃力を上昇させる。

これで攻撃力は3500。だが

まだ足りない。

「さらに伏せカード、？ライジング・エナジー？を？セイントナイ  
ツ・ドラゴン？を対象に発動！手札1枚を墓地へ送り、このター  
ンのみ対象としたモンスターの攻撃力を1500ポイントアップす  
る！」

「こ、攻撃力5000だあ！？」

驚愕のあまり、思わず呆然と神秘の龍を見上げるクロウ。

だが、そこは彼も決闘者。

すぐさま我に帰り

攻撃に備える。

「いくぞ！？セイントナイツ・ドラゴン？で攻撃！この瞬間、  
炎の魔銃 レボルスの効果を発動！このカードを装備したモン  
スターが攻撃する時、攻撃力を半分にして、プレイヤーへダイレクト  
アタック出来る！更に雷の双剣 アルスを装備したモンスターは、  
1度のバトルフェイズで2回攻撃することが出来る！攻撃力が半  
分になっても、？セイントナイツ・ドラゴン？の攻撃力は2500。

2回の攻撃が通れば、俺の勝ちだ！」

「ちいつ、狙いはそれか！ 罨発動、？ゴッドバード・アタック？！」

舌打ちしたクロウは、伏せていたカード1枚を表にする。

ゴッドバード・アタック。自分の場の鳥獣族モンスター1体をリリースすることで、場のカードを2枚まで破壊することが出来る。

BFは鳥獣族。アームズ・ウイングかアーマード・ウイングのどちらかをリリースすることで、発動することが可能！

「俺はアームズ・ウイングをリリースして、？セイントナイツ・ドラゴン？を破壊する！」

アームズ・ウイングが火の鳥と化し、セイントナイツ・ドラゴン目掛けて真っ直ぐに突っ込んでいく。

このままでは場はがら空き。次のクロウのターンが来れば、アーマード・ウイングの攻撃で負けてしまう。

だが 遊徒にもまだ、策はある！

「俺は墓地から、？聖騎士の歩哨？の効果を発動！」

「何、墓地から！？」

「このカードを墓地から除外することで、場の聖騎士と名のつくモンスター、或いは？セイントナイツ・ドラゴン？が効果によって場を離れる時、その効果を無効にし、破壊する！」

「そんなカード………そうか、？ライジング・エナジー？のコストで、それを墓地に………！」



見習い騎士のような戦士がセイントナイツ・ドラゴンを襲う火の鳥の前へ立ちほだかり、その突撃から身を挺して守り　そして、消えていく。

ゴッドバード・アタックの効果は、無効となった。

よって、セイントナイツ・ドラゴンの攻撃は

「これで最後だ！ セイントナイツ・ドラゴンの攻撃！ ? オーバ  
ー・セイントフォース?!」

クロウへと一直線に向かっていく、聖なるブレス。

その輝きが、黒きD・ホイールとその主を飲み込んで  
ユエルは、漸く終局した。

ク  
ロ  
ウ

LP 4000

デュエルが終了した事によりクロウのD・ホイールのエンジンが停止、ダクトを展開し排熱処理を行う。

「かーっ！ 負けたーッ！」

「楽しいデュエルだったよ、クロウ」

悔しがるクロウに遊徒はとても楽しいデュエルだったと告げる。

と、そこでヘルメットをはずした彼の顔を見て遊徒はわずかに驚いた、彼こそが遊徒が探していたシグナーだったのだ。だが、同時にあれほどの実力者なら納得できた。

やはりシグナー、半端のない強さであった。ジャックの時はデュエルが中断され龍可・龍亞兄弟の時はデュエルは行わなかった。

本当に、ここまで純粹にデュエルを楽しめたのは久し振りだったのだ。

「ま、こっちも久し振りに骨のある奴と戦えて楽しめたぜ」

「はは、それはよかった。……ん？」

遊徒の耳に微かな音が聞こえ、振り向く。

その方向に見えたのは碧色のランプとこちらに投降を呼び掛ける声。ギシギシと音が鳴りそうなくらいゆっくりクロウに向き直る。

「クロウ？」

「……そついや俺追われてるんだった」

「そついう事は先に言いやがれ、鳥頭アアアアッ!？」

「誰が鳥頭だ!？ とりあえず逃げるぞ、こつちだ!」

クロウに誘われ複雑な道筋を辿り徐々に治安維持局を引き離していく。

通常、彼の顔にあるマーカ―には追跡できるように信号を発する機能があるはずなのだが彼はどうやったかは不明だがその機能は無効化したらしい。

「それにしても本当に酷い状況だな、ここは……」

「……ああ、ゼロリバーズ以来ネオ堂実野シティからの復興支援は一切無いし浮浪児も未だに色んな所で見かける」

クロウの言葉には深い実感が籠っていた。

遊徒は知らないがクロウはかつてゼロリバーで全てを失った。その時の悲しみや絶望の程は想像を絶する、だが彼は生き残った。悲しみも絶望も味わいながらそれでも生きていく道を選んだのだ。

「クロウ、俺はシテイの人間だから君たちが受けた苦しみを理解することは出来ない」

「ああ、理解されようとも思っちゃいねえよ。あんな思いすんのは俺たちの世代だけで十分だ」

「……俺さ、子供達に人が受けた苦しみ分かち合う事が出来なくても、理解する事の出来る大人になってほしい」

「そうだ、俺達が受けた苦しみを次の世代の奴等の教訓にしなければいけないえ。皆が笑顔でいられる世界にしなければいけないだ」

ヘルメットの奥で遊徒は僅かに微笑した。

クロウは人が受ける苦しみの本質を知っている、だから人のために動けるのだ。遊徒から見ればそのあり方は尊く思えた。

「クロウ、悪いがここでお別れだ」「なに？ どうしたんだよ、いきなり……」

「なに、俺には行かなきゃいけないところがある。だからお別れ、それだけの話だ」

クロウははあ、と一つ大きなため息をつく。と遊徒に向けてサムズアップを向けてきた。

遊徒も返礼するかのごとくクロウに向けサムズアップを返す。

直後、分かれ道で二人は別れた。

「クロウ、いつかまた会おう!」

「ああ、その時はリベンジさせてもらうぜ!」

響き渡る声に別れを告げスピードを上げる。しばらく走っていると再び頭に声が響いた。

セイントナイトドラゴンだ。

『遊徒、どうであつた』

「良い奴だったよ、それに心に芯が通つてる。あいつなら素晴らし  
いシグナーになってくれる」

『そうか、では帰るとするか』

セイントナイトの言葉と共に視界がグニヤリとねじ曲がる、先程も  
起きた転移現象だ。

そうして気が付けば遊徒は人気がない道路を走っていた、先程の道  
に比べはるかに整備された道路。

「さて、次は        ブラックローズドラゴンとそのシグナーか」

更に物語は加速する

## Fourth turn・黒羽（後書き）

遊徒「今回の注目カードはこいつだ」

ブラックフェザー

《BF・アーモード・ウイング／Blackwing Armor Master》<sup>+</sup>

シンクロ・効果モンスター 星7 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2500 / 守1500 「BF」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。このカードが攻撃したモンスターに 楔カウンターを1つ置く事ができる（最大1つまで）。相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力を このターンのエンドフェイズ時まで0にする。

遊徒「戦闘では破壊されないというルール効果を持ち、楔カウンターを取り除く事で攻守を0にすることが出来る任意効果を持つ。BFのシンクロモンスターとしては必須と言っべきモンスターだろう」

クロウ「チューナーに縛りはあるがそれを無視しても強力なカードだ。今現在の俺のエースモンスターだぜ！」

遊徒「それにBFのチューナーには強力な効果を持った奴も居る、《疾風のゲイル》がいい例だな」

クロウ「制限に行っちゃったからなあ……まあ、《クリッター》とかでサーチ出来るし制限に居てもまだまだ暴れるな」

遊徒「他にも除外してから《闇次元の解放》での回収も可能だ」

クロウ「……途中からゲイルの解説になっちまったな」

遊徒「両方とも非常に強力だしな、解説の量も増えるだろう」

クロウ「そんじゃ今日はここら辺で」

遊徒「失礼させてもらうか」

クロウ・遊徒「NEXT DUEL standby!」

## Fifth turn・魔女

クロウとのデュエルを終えシティに戻ってきた遊徒、シュヴァリエを駆りしばしの間見ていなかったシティを見て回る。

近々大規模なデュエル大会が開催されるのかシティ内は活気に満ちていた。

「ま、イリアステルの陰謀なんだろうけどな」

キング（ジャック）を餌にしたシグナー搜索のための大会、そう遊徒は睨んでいる。

現在イリアステルの疑いがある人物は治安維持局長官、レクスⅡゴドウィンだ。

現在のネオ童実野シティを維持している治安維持局トップと言う事でかなりの無茶も通せる、それに長官と言うだけであらゆる場所に簡単に入ることができるだろう。

「それに俺、いや俺たちシグナーが勝つためには実力行使位しか無いよな」

ぶっちゃけて言えば遊徒がゴドウィンに確実に勝っていると言えそうなのがデュエルの腕しかない。

それにしたって危ういのだから本当に頑張らなくてはいけない。

遊徒はこれまでシグナーの影として戦ってきたがそのどれもにおいて物量で苦難に陥ってきた。

「奴等にはそれだけの物量があるからな……その差を埋めるためには質で補うしかないか」

しばらくホイールを走らせているとシティにしては奇妙に荒んだ場

所に入っていた。

遊徒はわずかに舌打ちしてしまった。

ここはダイモンエリア、シティにいながらにしてメーカー付き達がいる場所。小心者が集まる場所で不良、しかも相手の実力を測ることも出来ない雑魚ばかり。それらがいちいち集まってくるのが遊徒にとって鬱陶しいことこの上ない。

「……………ん？」

（不良たちが何か騒いでいるな……………何かあったのか？）

「……………だ、ま……………が出たぞーッ！」

「え、何が出たって？」

遊徒はわずかに首を傾げたが一瞬後にその理由を知ることになる。

最初に感じたのはかすかな風だった。

だがそれは徐々に巨大化していき嵐となる。そして、遊徒はその風の中に【ソレ】を感じ取った。

「これは……………シグナーの力!？」

（なぜシグナーがこんなところで力をふるっている!？）

遊徒が見つめるその先には仮面をかぶった一人の少女、遊徒はその瞳を睨みつける。

その仮面の奥には何かしらの感情があるように遊徒は感じ取ったが同時に言葉にならないほどの激情が彼の身を焦がす。



シグナーの痣と力は彼にとって至上の誇りとも呼ぶべきものだ。

五千年もの昔から生者を守護するために戦ってきたシグナー、その力を悪用するのは遊徒にとって許しがたき所業だ。

「貴様……ッ……何をやっている!？」

周囲には発現された力によって傷つけられた人々が居る。

中には単純にデュエルがしたいとここに来た一般人も存在している。  
「私に……哀しみを、苦しみを与えた者達に同じ苦しみを与えているだけだ!」

その言葉に遊徒は戦慄してしまった。

その刃のように鋭い敵意、そして、その奥に感じ取れる喜悅の感情。その全てに遊徒は僅かに震えた、おそらくあの言葉に表せない【ナニカ】に恐怖してしまったのだろう。

（なんなんだ……なんなんだよ、こいつは!？）

怒りと恐怖がごちゃ混ぜになり遊徒は冷静な思考が半分出来なくなっていた。

残りの半分はどこか冷静か冷めた感覚で黒薔薇の魔女を見つめる。

「デュエルだ……」

「なに？」

「俺とデュエルしろ!その腐った根性叩き直してやる!」

遊徒が魔女と戦う理由は気に入らない、一般人を傷つけた、ただそれだけだ。

それだけであるが故にその思いは固く魔女の身を貫く。

（こいつは何故私を恐れない……？何故私に挑もうとする？私が魔女だから？そうだというのなら……叩き潰す）

魔女、十六夜アキはその仮面の奥で目を苛烈に輝かせデュエルディスクを起動させる。

遊徒は記憶の中を探り彼女がどのシグナーのドラゴンに選ばれたかを記憶の中から思い出していく。

（確か……奴はブラックローズドラゴンに選ばれたシグナーだったはず、ならデッキは基本的に植物族で構成されているはず。なら！）

デッキをディスクにセットして一定の距離まで離れる。

これから始まるのは血で血を洗う凶悪なデュエル、ごろつきどももその気配を察しているのかどこかに消えて一人もいない。

「デュエル！」

「私の先攻、ドロー。手札からアイヴィウォールを守備表示で召喚。カードを一枚伏せてターンエンド」

【十六夜アキ：LP4000：アイヴィウォール、伏せ：一枚】

「俺のターン、ドロー！俺は手札からカードを一枚墓地に送り【偽りの刻印】を特殊召喚！」

偽りの刻印 5

サイキック族/効果

ATK/800

DEF/1200

効果

このモンスターは手札を1枚墓地に送ることによって特殊召喚できる。

このモンスターはこのモンスターの特殊召喚のコストにモンスターを墓地に送った場合コストにしたモンスターとして扱うことができる

形状が安定しない謎の文字が場に出てくる。

効果としてはクイックシンクロンに近いがシンクロ素材に縛りが無い分使いやすいだろう。

「墓地のレベル・ステイラーの効果を発動！ 偽りの刻印のレベルを一つ下げ、特殊召喚！ 更に魔法カードスター・チェンジャーを発動、偽りの刻印のレベルを一つ上げる」

現れたのは背中に星が描かれたてんとう虫、シンクロ使いにとってかなり使えるカードだ。

「偽りの刻印は自身の特殊召喚のコストにしたモンスターとして扱うことが出来るが今は関係ないな」

「レベル1、レベルステイラーにレベル5、偽りの刻印にチューニング！」

1 + 5 = 6

「集いし数多の試練が闇の聖騎士を呼び覚ます、光守護する騎士となれ！シンクロ召喚！断ち切れ、聖騎士ソードマスターザルウェ

！  
」

現れたのは漆黒の鎧を纏い、同じく漆黒の剣を腰に下げた騎士。そしてどこかウルクに似た、けれど真逆の雰囲気纏っている。

「ザルウエの効果を発動！ このモンスターのシンクロ召喚に成功した時チューナー以外のシンクロ素材にしたモンスターの数だけ相手場上のカードを破壊する。ダークマインド！」  
ザルウエから放たれた漆黒の波動がアイヴィウォールを破壊する。だが、十六夜アキは伏せていたカードを発動させる。

「永続罫。カースド・アイヴィを発動！ 墓地からアイヴィウォールを蘇生！」

「なら、バトルフェイズに移行する！ ザルウエでアイヴィウォールを攻撃、ソードスレイヴ！」

「アイヴィ・ウォールは攻撃対象になった時相手場上にアイヴィトークンを一体特殊召喚する」

遊徒の場に苗のようなモンスターがあらわれる。

アイヴィトークンの効果は破壊された時コントローラーに300ポイントのダメージを与える能力がある。

おそらくこれがアキの戦法なのだろう。

「更にカースドアイヴィの効果を発動、このカードが破壊された時相手フィールド上にアイヴィトークンを2体特殊召喚する」

再び現れるアイヴィトークン、これで遊徒の場の大半は埋め尽くされた。

遊徒の場にわざわざトークンを召喚すると言っことは何かしらの策なのだろうか、遊徒もそれを警戒してか表情が固い。

「カードを一枚伏せてターンエンド」

【遊徒：LP4000、手札一枚、アイヴィトークン×3、聖騎士ソードマスターザルウェ、伏せ一枚】

「私のターン、ドロ。手札から魔法カード、偽りの種を発動。手札からダークヴァージャールを特殊召喚さらにダークヴァージャールをリリース、ローズ・テンタクルスをアドバンス召喚！」

現れたのはバラを象った植物モンスター、攻撃力は2200、上級モンスターとしては低めの攻撃力だろう。

しかし、警戒すべきはその効果だろう。

ローズテンタクルスの効果はバトルフェイズ開始時に相手フィールド上に存在する植物族モンスターの数だけ追加攻撃できる効果がある。

遊徒の場にはアイヴィトークンが三体存在する。つまりこのターン、ローズテンタクルスは四回攻撃が出来るのだ。

「私はローズテンタクルスでアイヴィトークンを攻撃！ ソーンウィップ1！ さらにソーンウィップ2！」

「グアッ!？」

遊徒LP4000 2800

「ラスト！ ソーンウィップ3！」

「ウグアアアア!？」

遊徒LP2800 2200

遊徒のライフが一拳に削られてしまう。

だが、遊徒の場にはまだ聖騎士ソードマスター ザルウエが残されている。

次のターンにローズテンタクルスを破壊できる。

そう遊徒は考えるだが

。

「私はメインフェイズ2にローズテンタクルスに憎悪の棘を装備!」

ローズテンタクルスATK2200 2800

「何だと!？」

遊徒が想定する状況から逸脱するカードが登場する。

そして遊徒はそのカードが出たことで魔女、否、十六夜アキが抱く思いを僅かに視る事が出来た。

彼女がその身に抱く感情は一見すればただの憎悪だろう。

だが、その奥に潜むのは幼子のような寂しさ。自身を愛してほしいという欲望。

そして、何者かの影。

その二つを垣間見た遊徒はわずかに顔を俯かせた。

遊徒は自身の浅はかさが恥ずかしかった。

そして、同時に許せなかった、十六夜アキの心を誑かし利用しようとする者の行いが。

「……魔女、いや、十六夜アキ」

「ッ!？」

「なぜ知っているかという顔だな。ま、それも当然か。俺も治安維持局のサーバーをハッキングするまで君の事は知らなかったしな。アルカディアムーヴメント、奴らの事がなかったら君の事を知ることなかっただろうし」

アルカディアムーヴメント、最近急成長する新興会社の事だ。

その仕事は幅広く、社長のデイヴァインが世間の顔として動いている、だがその裏では色々と“黒い”事をしているらしい。

そして 彼女を操っているのはデイヴァインだろう。

「君の過去にあった事は知っている、だがそれが人を傷つける、いや孤独にしている理由にはならない」

「知ったような口を……ッ!」

「確かに俺は君にあった事を全部理解できるわけじゃない、だが、知る事は出来る! それは、人の痛みを理解することが出来なくとも人の痛みを知れる人になる。そういう事だ」

「黙れ、黙れえええええッ!」

アキから放たれる力の波動がよりいつそう強くなる。

それを一身に受けつつしかしそれでも遊徒は不敵に笑っていた。今不利なのは遊徒だが表情だけ見れば遊徒が遊徒が有利に見える、その不可思議な状況だったが遊徒は構わずさらに言葉を募らせる。

「所詮人間はどれだけ進化しようと力を手に入れても結局は完全に理解しあう事は出来ない……………だけど、理解しようと努力することは出来る！」

「違う、人の本質は自らと違う物を拒絶し排斥し孤独にさせる。それは貴様も同じだ！！」お互いの譲り合えない価値観がお互いを否定する。

「もう……………いい、私は何も考えなくていい。全てディヴァインが路を示してくる。それで十分よ」

「違う！ ディヴァインはお前に路を示しはしない、奴は奴自身の利益の為に前を利用しているに過ぎない、自分の頭で考え自分で判断し自分で行動しろ！ お前は人形なんかじゃないだろう！」

「無理よ……………私はディヴァインに導かれる、もうそれでいいじゃない。私はこのままターンエンド」

【アキ：手札一枚、ローズテンタクルス、憎悪の棘】

「絶対お前の目を覚まして見せる！ 俺のターン、ドロー。俺は魔法カード【騎士の疾走】を発動！ フィールド上に聖騎士と名のついたモンスターが存在するときデッキからカードを三枚ドロウする！

さらに聖騎士パラディン ウルクを召喚！」

現れしは白銀のザルウェと呼ぶべき騎士ウルク。  
遊徒を守護がするが如くアキの前に立ち塞がる。

「ウルクの効果発動！ このモンスターの召喚、特殊召喚時にデッ



キから聖騎士と名の付いたモンスター一体を手札に加える！俺は聖騎士ウォリアー クラストを手札に！更にリバーズカードオープン！魔法カード【刻印解放】！この効果で手札から刻印と名のついたモンスター一体を特殊召喚する、剛の刻印を特殊召喚！」

デッキからカードが一枚押し出され手札に加える。

その後デッキは自動的にシャッフルされていく、遊徒はまだまだ止まらない。

遊徒の相棒とも呼べるモンスターを呼び出すために。

「レベル4、聖騎士パラディン ウルクにレベル2、剛の刻印をチューニング！」

刻印が二つの輪となり空を舞い、四つの星となったウルクが空を彩る。

そして呼び出されるは救世主の名を冠する至高の騎士

！

「集いし星が新たな騎士を呼び覚ます、光守護する騎士となれ！シンクロ召喚

！」

列を為す星と輪が巨大な光に包まれる。  
現れる騎士の名は！

「救済せよ、聖騎士メシア ウルク！」

降り立った騎士は相変わらず美しく、荘厳な雰囲気を生み出す。  
その姿に遊徒はわずかに微笑む。  
自らの相棒とも呼ぶべきモンスターが居るのだから出来ない事は無い、そんな安心感が遊徒の身の内に宿った。

「さらに装備魔法、【闇の妖刀 破邪】をザルウエに装備！」

ザルウエ ATK 2600    3600

遊徒がジャック戦でも使った闇の妖刀、それがザルウエの手に納まる。

禍々しい気配を放ってはいるが頼もしい力を持った刀だ。

（これでローズテンタクルスの攻撃力を越えた……………いける！）

「聖騎士ソードマスター    ザルウエでローズテンタクルスを攻撃！  
カオススラッシュ！」

「……………」

アキ LP 4000    2600

アキのライフが大幅に削られるが当の本人は微動だにせず衝撃を受け止めた。

それどころか、仮面の下で僅かに笑みを浮かべるほどだった。

「ウルクでダイレクトアタック！    ドライブインパクト！」

「トラップ発動、ローズテンペスト」

ローズテンペスト  
カウンター罠

自分フィールド上に存在する植物族モンスターが戦闘で破壊されたバトルフェイズ時に直接攻撃が宣言されたときに発動できる。  
攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させる。

(く……！カウンター罠だからウルクの効果は使えない)

ウルクのスペルスピードは2、スペルスピード3のローズテンペストはウルクの効果では無効化することはできない。

ウルクで終わらせることは失敗してしまった、後遊徒が出きることは……。

「ウルクのレベルを一つ下げてレベルステイラーを守備表示で特殊召喚、ターンエンド」

【遊徒：手札二枚、聖騎士メシア ウルク、ザルウエ、レベルステイラー、伏せ一枚】

「私のターン、ドロー。永續魔法アイヴィシャツフルを発動、このカードは私のターンの間相手フィールド上に存在するモンスターを植物族モンスターとして扱う、さらに手札からコピープラントを召喚、効果を発動！ 相手場上に存在する植物族モンスター一体のレベルをコピーする。私は植物族となったウルクのレベルをコピー」

コピープラント 1 5

「さらに墓地に存在するダークヴァージャーの効果を発動、場上にチューナーが存在する場合墓地から特殊召喚出来る。現れよ、ダークヴァージャー」

再び現れる双葉の植物モンスター、そしてレベル5となったチューナー、コピープラント。

彼女が何をするかは明白

シンクロ召喚だ。

「レベル2、ダークヴァージャーにレベル5、コピープラントをチユーニング」

2 + 5 = 7

（来るか………黒薔薇の名を冠するドラゴン！）

「冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け、シンクロ召喚。咲き乱れよブラックローズドラゴン！」

現れた黒薔薇のドラゴン、その姿はどこか植物に似ているように思える。

翼は紅い花弁が如く、存在する触手は何者を寄せ付けけないような棘に覆われている。

その瞳は綺麗な紅に染まっている。

「出て来たか……ブラックローズドラゴン」

「私の忌むべき印を……私の憎悪を具現する龍だ。貴様の言う本質がそうだと言うのなら倒して見せろ！ ブラックローズドラゴンの効果を発動、ブラックローズドラゴンの効果を発動、このカードの特殊召喚成功時、場上に存在する全てのカードを破壊する！ 散れ、ブラックローズガイル！」

襲い来る花弁の嵐がフィールドを飲み込もうと荒れ狂う。だが遊徒とてただ嵐を見ているだけではない。

「聖騎士メシア ウルクの効果を発動！ 手札を一枚墓地に送りブラックローズの効果を無効にする！ シーリングセイバー！」

花卉の嵐を突き抜けウルクがブラックローズドラゴンに剣を突き立てる。

すると唐突に花卉の嵐は止んだ。

止んだ嵐の後には元に戻ったフィールドのみ、ウルクも遊徒のフィールドに戻っている。

「だが貴様の手札はもう無く、ウルクの効果は使えない。ブラックローズドラゴンの効果を発動、墓地に存在する植物族モンスター一体を除外する事で相手フィールド上に存在するモンスター一体の攻撃力をこのターンの間0にする。ウルクの攻撃力を0に」

ウルク ATK 2500 0

「……」

「ブラックローズドラゴンでウルクを攻撃、ブラックローズフレア！」

だが遊徒もただでは相棒をやらせはしない。

「リバースカードオープン！ 立ちはだかる強敵！ ブラックローズドラゴンの攻撃対象をザルウエに変更！」

「クッ……」

アキ LP 2600 1400

立ちはだかるザルウエにブラックローズドラゴンは切り捨てられフィールドから姿を消した。

同時に奪われたウルクの力も戻っていく、アキの手札は既に無く、伏せカードもない。

このデュエル、遊徒の勝ちだ。

「俺のターン、ドロー…………十六夜」

「……………」

遊徒が話し掛けるがアキは何の反応も示さない、彼女の心を覆い隠していた魔女の仮面は既に大量のヒビが入っている。後少し衝撃を与えたら即座に崩れる程に、だからこそ遊徒はアキに仮面が修復された後に再びアキの仮面を破壊してくれる人物の為に楔を打ち込む。

「十六夜、お前がサイコデュエリストと言うことは分かった。だからこそ、お前は探さなければならない、お前を受け入れてくれる人を、サイコデュエリストとかそんな些末なことじゃなく十六夜アキと言う一人の人間として受け入れ大事にしてくれる人を」

「…………そんな人、見つかったら苦労しないわよ」

「だから探せと言った、向こうから来るのを待つのではなくお前が探しに行け。それが…………お前がなすべきことだ。その為にこのデュエルを終わらせる。ウルク、十六夜にダイレクトアタック！ ドライブインパクト！」

『ハアアアアッ！』

アキLP16000

この瞬間、デュエルの決着は着いた。だが、問題が全て解決したわ

けではない、むしろ多くなったと言つべきか。

例えば  
騒ぎを聞き付けて此方に近付いてくるセキュリテ  
ィ、など。

「十六夜、たまには人を傷つけるのではなく癒す事もやってみたら  
どうだ？」

そう言い残し遊徒はホイールに乗りその場を去る。正直に言えばア  
キとのデュエルで体力は削られ傷も負った、そんな状態でホイール  
に乗るなど自殺行為も甚だしいがアキの心痛を増やすわけには行か  
ないので我慢する。

(少しの間で良い、持てよ俺の体……………)

走り去る遊徒の背後で黄緑色の光の柱が延び上がりすぐに消えた。  
アキも帰ったのだろう、それを見届け遊徒は暫くホイールを走らせ  
るが。

(や……………ば、意識が遠退……………く)

そこで遊徒の意識は闇に落ちて行つた。最後に見たのはトップスと  
闇夜に輝く綺麗な月だった。

その日の夜、神夜かくや 愛夜あやは普段の日課で星占いを行っていた。

彼女の家系は遙か昔から魔術使いの家系として裏の世界に関わってきた。

二千年前のシグナーの戦いにおいてもダークシグナーの尖兵の対抗策として参加していたという記録もある。

そんな彼女には魔術師としての才はないが代わりにデュエルモンスターズと星占いに関する才能に突出していた。そんな彼女の日課の途中にある音が聞こえた。

何かが擦れ事故が起きた時のような。

「何かしら……?」

『くるるるる?』

「ああ、大丈夫よ。少し見てくるから記録お願いね?」

『クルウ!』

彼女の相棒ともいえるデュエルモンスターズの精霊、マジシャンズ・スペル・ドラゴンが愛夜の指示に従い星図の観測・記入を続けている。

それを確認して愛夜は家から出る。

先ほどの音から大体の場所を割り出しそちらに足を向ける。

「えーっと、大体ここらへんだと思うんだけどなあ」

「う……ぐ、あ……」

「ッ!? 大丈夫ですか!」



そこに倒れていた青年とホイール、すなわち遊徒とシュバリエ。それを見た愛夜はすぐに駆け寄る、遊徒の体には目立った傷は無いが沢山ある小さな傷やホイールと共にクラッシュした時の傷が原因で出血が激しい。

（不味い……………早く処置をしないと）

とりあえずホイールに遊徒を乗せ自宅まで押していく。成人に近い遊徒とホイールの重みで遅々として進まないがそれでも確実に進んでいく。

（……………あ、そうだ。これがDホイールなら決闘盤はあるはずよね）

決闘盤のおおよその位置を確認して起動させる。幸いな事に破損などとはしていないようだ、これならば愛夜は自分の力を使える。

「お願い、来て。レイカー」

『……………ハッ！』

デッキからカードを1枚抜き取りディスクにセットするとそこから現れたのは緋色の甲冑に同色の武器を装着した騎士。

現れると同時に騎士、レイカーは愛夜に臣下の礼をとるがそれを止め、愛夜はレイカーにホイールを運ぶように指示する。

「それにしても……………この人どうしたのかしら？」

『何かしら事件に巻き込まれて逃げている内に、と云うことでしょ  
うか？』

「分からないけど、今はこの人を助ける方が先よ」

そう言い、愛夜はレイカーを伴い自宅までの道筋を辿っていく。

愛夜は今はまだ知らない、この月夜の出会いが自分の運命に大きく関わっていく事を。

だが今は運命は序曲を奏で始めたばかり、その事実を知るのはもう暫く先だろう。今はただほんの少しの刺激を伴う平穏が続いていた。

## S i x t h   t u r n   邂逅

視界が暗転し、ゆさぶり、痛み、肉が焼けるような匂いを遊徒にもたらず。

そんな地獄の中に居ても遊徒は正常な思考を手放さかった、冷静に状況を把握して今の自分が置かれている状況を知る。

（これは……夢、それも、あの日の、何故？ 俺は十六夜とデュエルをしてその後……）

不意に遊徒の意識が混濁する、いくら足掻こうが意識レベルの低下は抑えられない。

むしろ身を任せてしまいそうになる。

堕ちていく精神が警鐘を鳴らす、堕ちてはいけない、と。

その声に従い気確かにする。

するとようやく目が覚めるのか体が浮上するような感覚に包まれる、今度はそれに抗わず遊徒は目が覚めた。

（……………ん？）

目が覚めるとそこは知らない天井だった。病院かと思ったが特有の消毒液の匂いはしていない、周囲を見渡してどこにどこかを探る

うとするが清潔に保たれている生活感があるだけでこれと言った特徴は無い。

「どこだよ、ここ………?」

とりあえず歩き回り情報を得ることにした。

廊下に出てみるとフロアリングになっていて恐らくだがどこかの住居に住む一般人に拾われたのだろうか。

「だとしたら何かしらお礼をしなきゃいけないな」

とりあえずリビングとおぼしき方に歩いていきドアを開けると。

「………は………?」

「ふえ?」

そこに居たのは下着姿の愛夜でまさか着替え中とは思わなかった遊徒は固まってしまい、愛夜も愛夜で着替え中の乱入者に目を丸くして固まった。

嫌な沈黙が二人の間を流れる、そんな沈黙が破られたのは第三者のおかげだった。ただし遊徒には少々過激な破り方ではあったが。

『愛夜から離れやがれ、このヤロオオオツ!』

どこからともなく十歳位の女の子が現れたかと思うと手に持っていたメイスらしき物で遊徒に殴りかかってきた。

「危な!?!」

咄嗟に後ろに飛び退くが少女はめげずに、と言っかなおいきり立って襲い掛かってくる。

「ストラ、やめなさい！」

『ッ！ でも愛夜、こいつは！』

「私がここで着替えていたのが悪いんだから彼は悪くないわ」

愛夜の言葉にストラは遊徒を睨み付け、舌打ちした後に霞のように消え失せてしまった。

「……消えた……？」

「ストラはデュエルモンスターの精霊ですから……」

そう言って愛夜はいつの間にか着替えたのか白い毛糸のセーターと茶色のロングスカートを纏っていた。

どこか恥ずかしそうなのは先ほどの事があるからだろう。

「デュエルモンスターの精霊、ね。精霊って言っならこの世界に実体化出来ないんじゃないのか？」

「それはこの家が巨大な地脈の上に建っているからです、地脈から漏れだしたエネルギーを利用して実体化するんです。ついでに言えばこの家の半径500メートル以内ならどこでも」

その説明が事実ならばここはかなり重要な場所だろう。

地脈にはかなりのエネルギーが含まれておりそこに力を加えようも

のなら巨大な地震を引き起こす可能性がある。

さらに言つと地脈の別称は龍脈、シグナーにとつても縁が深い物だ。実を言えば赤き竜もこの竜脈からエネルギーを補給しているのだ。

「……………なんで君はそんな事を知っているんだ？」

「え？ いや、そのえーと……………」

「いや、もういいや。恩人に聞くことじゃなかったな、それにこれ以上世話になる訳にはいかないからこれで失礼させてもらうぞ」

遊徒はそれだけ言い残すと元の部屋に戻っていく、遊徒はイリアステルから目を付けられている。

下手に関わると愛夜に迷惑をかけると思ひさつさとこの家を出ようと動こうとしたが……………。

「まっ、待つてください！ 怪我をしてるのにどこに行くんですか！？」

「別に宛は無いが……………まあ、どうにかなるだろうし大丈夫だ」

遊徒は部屋に荷物を取りに戻ろうとしたがその前に愛夜が立ち塞がった。

手当てした者として遊徒を今動かすわけにはいかないらしい、それに、と愛夜は続ける。

「手当てしてもらったのに何のお礼も言わずにどこかに行くの？」

半泣きの体で愛夜は遊徒を見つめる、その表情に遊徒は罪悪感に駆られる。

遊徒は祖母から女性は泣かせるな、受けた恩は必ず返せと教育を受けた。

それゆえかこういう事態になると対応に困ってしまうのだ。暫く頭を抱えていたが仕方ないと一つ大きなため息をつくと愛夜に向き直る。

「分かった、暫く厄介になるよ」

「うん、よろしくね！ えーと」

「遊徒だ、光 遊徒」

「私は愛夜、神夜<sup>かぐや</sup> 愛夜<sup>あや</sup>よ。さっきのは私の家族のストラ、他にも居るんだけど今度紹介するね」

そう言つて愛夜はほほ笑んだ。

遊徒はそれに応じた後ゆつくりと部屋の中に歩を進める。  
ふと机の上を見ると何かしらのノートが乗っていた。

「これは……星座の位置を示したノート、か？ 星占いなんてやっているのか？」

「うん、家の家系つてさ昔からそういうので生計を立ててたんだ。結構当たるから政治家さんたちもよく来るんだよ」

そう言いながら愛夜は水を差しだしてくる。  
寝起きだから喉が渴いているでしょう、と。  
丁度遊徒も欲しかったので貰って飲んでいく。

「政治家と言えば……最近では十六夜　英雄さんがいらつしやいましたね」

「ブフォッ!？」

十六夜、という苗字に思いっきり遊徒は水を噴出させてしまう。というか、誰でも噴出させてしまうだろう。ここに来る前までデュエルしていた人物の親の名前が出てきたとあつては思い切り驚いてしまう。

「……どうかしたんですか？」

「い、いやなんでもない。……ん、神……夜？」

ふと、神夜と言う苗字が遊徒の頭に引つかる。神夜、と何度か呟くが靄にかかったように思い出せない。

結局思い出すことをやめてキッチンに立つ。どうせ寝ていたって何もする事が無いのでご飯を作ることにしたのだ。

「さて、何があるかな………」

「え? いや、ちょっと、その体で料理するんですか!？」

「あんまり無いなー、仕方ない、具材からおでんを作るか」

「人の話聞きましょうよ!？」

呆れたように頭に手を当て一つ大きなため息を吐き愛夜は遊徒を見上げてきた。



遊徒はその視線の意味に気づかずさらりと流してしまう、と言うか既に調理に気が行ってしまっている。

「汁は………むう、あんまり調味料が無いな。買ってくるか？」

「もう放っておきましょうか………」

愛夜は結局遊徒を止めることを諦めた。調理中の遊徒を止めることを出来るのは遊徒の祖母ぐらいだろうか………。

そして結局二人でできたおでんを食べることになったのだが………。

「何故に具が四種類しかないの？」

「家のおでんはずっとこれだな………家族との絆を表しているんだ」

そう言う遊徒の横顔はどこか淋しそうで愛夜は悪いことを聞いてしまったかと思っただが遊徒は特段に気にしている様子は無いので愛夜は聞く方が失礼にあたるかと思っただのか何も言わなかった。

「よし、少し材料が無かったが完成だ」

そこにあっただのは材料が無いと言う言葉がとてもではないが信じられないような程上手に出来上がっていたおでんがあった。

具は四種類しかないがそれでもおいしそうな匂いが漂っている。

四つの具材が奏でるパーフェクトハーモニーとでも呼ぶべきだろうが、それほど素晴らしいおでんが愛夜の前に出現していた。

「はー、美味しそう」

「美味しそうじゃない、美味しいんだ」

「ふふ、自信满满ですね」

「おばあちゃんは言っていた……旨い飯屋は看板すら出さない、と」

「……意味が分からないよ」

遊徒と愛夜の掛け合いは暫く続き、その間におでんと一緒に炊いておいたご飯も無くなっていきそして無くなった。

「はふう、お腹一杯。ごちそうさま」

「お粗末様でした、満足したか？」

「ええ、とても素晴らしい味でしたよ」

ニコニコと笑う愛夜は空いた食器を持ち席を立つ。  
どうやら食器を洗うようだ。

食器は自分が洗おうと思っていた遊徒はあわてて席を立つが、「お客様さんに洗わせるわけにはいきません」とどこか威圧感のある笑みを浮かべて遊徒を押しとどめる。

思わず遊徒は一步下がって警戒してしまうほどに。

だが遊徒も祖母に鍛えられた身、素人（と遊徒は思っている）にずっと怯えているわけにはいかない。

「君がなんと言おうと俺が作ったんだから俺が洗う、そうしないと恩を返すことも出来ない」

「別に返してもらおうとは思っていません、それに怪我人の遊徒さんを働かせるわけにはいきません」

「俺に料理させたくせに？」

「うっ！」

「しかも怪我人って言うなら君の家族が殴りかかってきたよな」

「うううう……」

遊徒の言葉に愛夜はどんどん追い込まれていく。

半泣き状態で遊徒を睨み付けているが遊徒は小揺るぎもしない、と言うか先ほどの様子とのギャップで不覚ながらも可愛いと思ってしまった程だ。

さすがにこのままにしておくのは可哀想と思ったのか遊徒は前言を撤回する事にした。

「分かったよ、それじゃ皿洗い頼んだぞ」

遊徒の言葉に分かりやすいほど気分を高揚させた愛夜は食器を持って鼻歌を歌いながらキッチンに入っていく。

「それにしても………神夜、か」

遊徒の記憶の底に僅かに残る知識、かつてまだ集落が健在だった頃、神夜と言う名はどこかで聴いたことがある。

それは本当におぼろげな記憶で確証は持てないがシグナーに何かしらの関わりがあったように思う。

神夜、神夜、と何度もつぶやく度に記憶が蘇ってくる。

「ああっ!？」

（思い出した……！ 確か俺と同じようにシグナーを守る使命を負った一族！）

思わずこんな偶然があるのかと疑ってしまうが同時にこの出会いに感謝したいぐらいだった。

共に戦える仲間となりえる者が現れたのだから、だがそこで思考が停止した。

（馬鹿か、何を期待してるんだ俺は……… 神夜が伝承の一族だとしてもそれは既に何年もの昔の話、今ここに居る彼女はただの女の子、巻き込む訳にはいかない）

そんな自分勝手な思考が遊徒を蝕む。

そして鼻唄を唄っている愛夜の声が遊徒の戦い続きで歪んだ心を苦しませる、遊徒は席を立つと部屋に戻る道筋を辿る。

部屋に戻りベッドに倒れこむ。起きてから頭が混乱する事ばかりが起きている。

デュエルモンスターの精霊、龍脈の存在、様々な事象で頭は混乱の境地に達していた。

すでに頭痛が激しくなってきた。

「また、寝るか……」

ベッドに倒れこむとすぐに眠りこんでしまう遊徒、その貌は心の痛みに彩られ痛々しいものだった。

そんな遊徒の部屋に入ってくる影があつた。

愛夜だ、愛夜は眠っている遊徒の横に近寄るとゆっくりと遊徒をベツドに入れていく。

「よつぽど疲れていたんですね……しかも、あの力の残滓は……」

（間違いなく、シグナーの力。そして、今年は前回のシグナーが出てから数千年に当たる年。地縛神が復活し、活動を始める。それに対する抑止力として私は動かなければならない、私がこの人を救つたのは……）

「今の生活に未練があるから、かな？」

『未練があるなら、戦わなきゃいいのに』

「そう言う訳にはいかないわ、ストラ。私が戦わなきゃシグナーの皆さんに迷惑がかかるわ」

『…………』

淡く微笑む愛夜にストラは怒りを募らせる。

主が死地に赴く覚悟を止められない事を、何よりもそれを心のどこかで認めてしまっている自分に。

愛夜はそんなストラの姿に苦笑した、彼女としては幼い頃からの役割だから既に一つの常識となっている。

そんな時、愛夜の腕がうっかり遊徒の左腕の袖を捲り上げてしまう。そしてそこにあるシグナーの痣を、悪しきものを裁く竜の邪眼リリオンジャッジメントの痣を。

「これは……………！？」

『嘘だろ……………！？』

たった今、話していたシグナーの痣が目の前に現れた。

その事実<sup>あや</sup>に愛夜は驚き、ストラはまだあつた筈の時間が無くなったことに呆然とする。

地縛神の復活は……………近い。

## S i x t h   t u r n   邂逅（後書き）

龍亞「後書きアドベンチャー、始まるぜ！」

龍可「え、これ冒険なの！？」

龍亞「チツチツチ、甘いぜ、龍可。俺達は本編のシグナーとの交流編が終わればお役御免、出番が無くなるんだ。つまり」

龍可「ここで出番を稼ぐしかないって事ね」

龍亞「まあ、作者さんのテンションによって無くなる可能性があるけどね」

龍可「ダメじゃない！？……それは置いといて、今回はメインヒロインである神夜愛夜さんが登場したわね」

龍亞「龍可と同じように精霊が見えるみたいだね、家の周囲限定だけどそれでも精霊と話せるっていいなあ」

龍可「まあ、見えないのは仕方ないじゃない。それから作者さんからの伝言よ」

龍亞「お、なになに？　俺たちの出番増量？」

龍可「違っわよ、この遊戯王・ANOTHER LEGEND - を見てくださっている皆様、皆様が考えているオリカ等を募集します。主人公と仲間達が使うカードはオリカが主流、作者さんだけじゃ賄いきれないかもしれないので多くのカードを待っています！」

龍亞「感想や指摘も待ってるぜ！」

龍可「こら龍亞、敬語！とにかくたくさんの応募や感想を待ってます。それでは！」

龍亞「さようならー！」



## Seventh turn . 疾走

遊徒が愛夜の家泊まった翌日、遊徒は自らのホイールの調整を行っていた。

今から最後のシグナー、不動 遊星。

今現在彼は雑賀と言う男のアジトに滞在しているらしい。

「……不動、遊星か」

「……そいつがどうしたんだよ？」

「ッ！？ 君は、確かストラ、だったか？」

唐突に後ろに現れた気配に遊徒は咄嗟に臨戦態勢を取ってしまうがストラだった事で構えを解いた。

そして、再びホイールの調整に戻る。

いくらあのマッドサイエンティスト、カナン・オズボーンが作ったホイールと言えど強い衝撃が加われば破損もする。

「ッチ、少しマズツたか……フレームにガタが少し来てるな」

「それってまずいのか？」

「ああ、下手したら走行中にバラける事もある。……しばらくはしようがないが時期を見てカナンの所に持ちこまなきゃな」

遊徒はどこか疲れを感じる声音で呟いた。

ストラはその言葉にどこことなく哀愁が漂うのを感じていた。

『お前……結構苦労してんだな』

「あいつの実験で近所の人の迷惑になってその謝りに行った事十数回、実験の被験者に強制的にされた事数百回、そして何よりも！あいつに解剖されそうになった事数千回！」

その遊徒のセリフにストラは顔を引き攣らせた。  
主に解剖、という部分に。

それよりも、とストラは最初の部分に話を修正する。

『お前さ……シグナーなんだろ？』

「ッ！？……何の事かな？」

『下手な嘘はやめろ、あたしにそんな嘘はつーじねー』

「……」

黙り込んでしまった遊徒はそれでもホイールの調整を続ける。  
後ろから感じるストラの声に耳を傾けながら。

『愛夜は……シグナーとダークシグナーの戦いを影から支える魔術師の一族の末裔なんだ。だから愛夜も戦いに加わらなければならな  
いんだ、けど！愛夜は優しすぎて戦いに参戦できるような奴じゃな  
いんだ！』

「……なら力ずくでも戦わせなければいい、なぜそうしない？」

『愛夜の、ううん、神夜の現家督、神夜 劉巖が強制しているんだ。  
そうしなければ愛夜の両親を殺すって』

遊徒はストラの発言にホイールを弄くる手が止まった。

両親を殺す、その言葉で愛夜を彼女の祖父が縛っている。

両親を、一族全てを失った遊徒にそんな手を使ってくる劉巖は許せなかった。偶然見つけただけの他人である自分を手当てしてくれた愛夜。

その彼女を縛り付ける劉巖を遊徒は赦せなかった。

だが今は不動遊星の元に行かなければならない。

「ストラ」

『……なんだよ?』

「劉巖は今すぐには愛夜の両親に手を出さないんだよな?」

『うん、そのはずだ。人質は目的を達成するまでに殺したら意味が無くなるし……』

とりあえずは遊徒は安心してため息を吐いていた、これで暫くの猶予があると分かったからだ。今、なすべき事を出来る時間がある。それだけで遊徒は安堵した。

（取り急ぎ不動遊星の実力を計り、その後劉巖の排除にかかるか）

「ストラ、俺はやらなければならぬ事がある。愛夜を助けるのはその後になるが良いか?」

『……助けて、くれるのか?』

信じられない、と小さく呟くストラに遊徒は苦笑した。

今まで何とかしようと必死に戦ってきたが助けてくれる人は居なかった。

だが、運命に縛られた愛夜を、縛ったはずのシグナーが助けてくれると言った。

その事実ToStraは呆然し、そして気が付いたら涙が流れ始めていた。

「なーにを泣いている」

「……つく……今まで……ひつく……助けてくれるって……言ってくれる奴なんて居なかったから……」

泣きじゃくるToStraに遊徒は静かに頭を撫でてやり続けていた。そこに別の影がやって来た。

「ToStraがそれほどなつくのは珍しいな」

「おわっ！？……レイカーかよ、驚かせんな！っーかなついてなんかねえよ！！」

ToStraとレイカーの会話に苦笑しつつホイールの調整を終わらせる。そのままモーメントを起動させきちんと動くかどうかを確認する。

「よし……ToStraと、……たしかレイカー、だっけか？俺は少し出てくるから愛夜に伝えといてくれ」

それだけ言い残し、遊徒はホイールを発進させる。

目指すはドラゴンテイルのシグナー、不動遊星の元だ。

「ここいらか？」

遊徒がついたのはシティにしては妙に寂れている場所、一時期の不景気からほとんど人がいなくなった地帯だ。

だが、そんな中にも僅かながら人の気配はする。

ホイールのエンジン音が微かに聞こえてくる、何処かでホイールを調整しているらしい。

不動遊星が居る場所が分からないのでとにかくそこに行ってみることにした。

「ここか……」

目の前にあるのは例に洩れず廃れた廃ビル、だが目の前のシャッターは半開きにされていた。

そこから覗く緋色のホイールからエンジン音は出ていた。

（ふむ、どうやらジャンクパーツから組み上げたホイールみたいだな……）

「……何か用か」

「あ、いや、ホイールのエンジン音が聞こえたから見に来てみたんだ。邪魔してしまったか？」

「いや、ちょうど調整が終わったところだ。後は試験走行だけだ……あんたもホイールを持つているみたいだな」

「ああ、少しガタが出始めているけどもう少しは持つと思うよ」

そう言うのと遊星が何事かを考え始めた。

暫く考えた末に顔を上げるとある提案を行った。

曰く、Dホイールの試験ライディングデュエルに付き合ってくれないか、と。

遊徒は一瞬呆然としたがすぐに我を取り戻しニヤリと不敵な笑みを浮かべ頷いた。

数分後、遊星と遊徒はお互いのDホイールに乗り、デュエルを開始しようとしていた。

二人の間には先程のようなホイールについて和やかに話していた雰囲気は消え失せ今から始まる闘い（デュエル）に集中し、身を切るかのごとく鋭い気配がその場を支配する。

「準備はいいな？」

「ああ、いつでも始めよう」

「お言葉に甘えて……」

「フィールド魔法、スピードワールドセット！」

『デュエルモードオン、オートパイロットセット』

フィールドが速さのみで戦う空間、スピードワールドに支配される。これから始まるのはスピードの世界で進化したデュエル、ここでは普通の魔法は使えない。

使えるのはスピードスペルのみ、それがライディングデュエルだ。

「ライディングデュエル……………」

「アクセラレーション！」

決闘が、始まる。

「先にあのコーナーを制した方が先攻だ！」

「……………」

二台の騎馬<sup>ホイル</sup>がしのぎを削りコーナーに肉薄する。  
そしてそのコーナーを制したのは

「くっ、先攻を奪われたか……………」

遊星だった。

先手を取った遊星は手札に存在する可能性の中で最良の物を選びと

る。

それは……

「俺のターン！ 手札からボルトヘッジホッグを守備表示で召喚！ カードを二枚伏せてターンエンド！」

【遊星：LP4000、手札3枚、ボルトヘッジホッグ、伏せ2枚】

「ボルトヘッジホッグ……チューナーが存在する事で真価を発揮するモンスターか、なら俺も行かせてもらう！ 俺のターン！ ドロ  
ー！」

手札に来たのは聖騎士ウォリアー クラスト、聖騎士の中でも強力な力を持つ騎士だ。

「聖騎士ウォリアー クラストを召喚！ 効果を発動、召喚成功時相手モンスターの表示形式を変更する。ボルトヘッジホッグを攻撃表示に！」

地面に突き立てられた錫杖から次々と石柱がボルトヘッジホッグを襲い強制的に攻撃体制を取らせる。

後に残ったのは無防備な態勢になったボルトヘッジホッグだけだった。

「クラストでボルトヘッジホッグを攻撃！ メタルインパクト！」

「トラップ発動！ くず鉄のかかし、戦闘を無効にする！」

「破壊出来ないか…… クラストは攻撃後守備表示になる、更にカードを一枚伏せてターンエンド」



【遊徒：LP4000、手札4枚、クラスト、伏せ1枚】

遊徒・遊星：Sp c 0 1

（初ターンはあまり動きがない、か。此方の伏せカードを警戒しているのか）

遊星が伏せていたのは『エンジェルリフト』、レベル2モンスターを墓地から特殊召喚するカードだ。

「俺のターン！」

遊徒・遊星：Sp c 1 2

「手札からSp・エンジェルバトンを発動！ カードを二枚ドロ―し一枚墓地に送る。俺はジャンクシンクロンを召喚！」

現れたのは小さなエンジンを背負った小人、ジャンクシンクロン。遊徒はそれを見て僅かに舌打ちする、シンクロンと付くモンスターは大抵チューナーだからだ。

ならば考えられることは一つ      シンクロ召喚だ。

「ジャンクシンクロンの効果を発動！ 召喚成功時、墓地に存在するレベル2以下のモンスターを効果を無効にし特殊召喚する。蘇れ、スピードウォリアー！」

現れたのはローラースケートが特徴的な戦士。

チューナーとのレベルを足せば遊星が出せるのはレベル5かレベル7のシンクロモンスター、遊星が選んだシンクロモンスターは……

…。

「レベル2、スピードウォリアーにレベル3、ジャンクシンクロンをチューニング！」

ジャンクシンクロンがエンジンを起動させ、3つの輪にその姿を変える。

そこにスピードウォリアーが飛び込むとその肉体は分解され2つの星に姿を変えた。

「集いし星が新たな力を呼び起こす、光差す道となれ！シンクロ召喚、出でよジャンクウォリアー！」

レベル5のシンクロモンスター、ジャンクウォリアーがフィールドに呼び出された。

攻撃力は2300と上級モンスターとしてはやや頼りない、だがその効果でジャンクウォリアーは大きく化ける。

「ジャンクウォリアーの効果を発動！シンクロ召喚に成功した時自分フィールド上のレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分攻撃力をアップさせる。パワー・オブ・フェローズ！」

ジャンクウォリアー ATK 2300 3100

上級モンスターとしてはやや頼りなかったジャンクウォリアーが仲間との絆を繋ぎその力を高めていく。

最初は遊徒が押していた筈だが気が付いたら遊星がフィールドを制圧していた。

遊徒は遊星のそのプレイングに素直に凄と思った、一つ一つのプレイングに無駄がなく、ジャンクウォリアーの強化すら計算に入れ

ていたのだから。

「強敵……だな」

「ジャンクウォリアーでクラストに攻撃！ スクラップフィスト！」

「グウウウツ！」

「カードを二枚伏せ、ボルトヘッジホッグを守備表示に変更しターンエンド」

【遊星：LP4000、手札二枚、ジャンクウォリアー、ボルトヘッジホッグ、伏せ三枚】

「俺のターン、ドロー！」

遊徒・遊星SpC2 3

「Sp エンジェルバトンを発動、二枚ドローし手札から一枚墓地に送る。さらに疾走の刻印を召喚、効果を発動！ このモンスターの召喚成功時に墓地からレベル4以下のモンスター一体を特殊召喚する。現れる、ウルク！」

場に現れた青と白銀の鎧を纏った騎士、ウルク。

聖騎士と聖騎士の絆を紡ぐ騎士だ、だからこそ彼のもとに騎士は集う。その絆があるからこそ遊徒も戦えるのだ。

「ウルクの効果でデッキから聖騎士一体を手札に加える。俺はシトラスを手札に加える」

遊徒はシトラスを手札に加え一端思考する。

このまま聖騎士メシア ウルクをシンクロ召喚してもいいがジャンクウォリアーの攻撃力は上回れない。遊徒の手札には場をどうにかできるカードはないがどうにか場を繋げるカードはある。

「レベル4、聖騎士パラディン ウルクにレベル2、疾走の刻印をチューニング！」

ウルクと疾走の刻印が空へ飛び出していく、遊徒が最も信頼する騎士を呼び起こす為に。

そして自身の主を救うため、ウルクは真の姿へその姿を変える。

「集いし星が新たな騎士を呼び覚ます、光守護する騎士となれ！シンクロ召喚、救済せよ、聖騎士メシア ウルク！」

呼び出されたのは救世主メシアの称号を授かった騎士、ウルク。

ジャンクウォリアーに対抗する化のようにその姿には力がみなぎっている。

だが攻撃力は劣っている、その為に遊徒はその差を埋めるためにボルトヘッジホッグを狙う。

「ウルクでボルトヘッジホッグを攻撃！ ドライブインパクト！」

加速したウルクの剣がボルトヘッジホッグを襲い破壊した。

これでジャンクウォリアーの攻撃力は元に戻った。

これで次のターン、遊徒はジャンクウォリアーを破壊する事が出来る。だが相手は仮にもシグナー、油断は禁物だ。

「俺はこのままターンエンド」

【遊徒：LP4000、手札五枚、ウルク、伏せ一枚】

「俺のターン、ドロー」

遊徒・遊星SpC3 4

「……強いな、遊徒」

「そう言う遊星だってな、正直、今まで戦った中でトップクラスだ」  
このライディングデュエルの中ではお互いの息遣いすら感じ取れる、  
そして何よりも遊星から感じる疾走感溢れる強烈な風。  
その全てが遊徒を楽しませる。

「お前になら使ってもいいかも知れないな……」

「……………」

遊星はデッキからカードを一枚ドローした。

遊徒にはそのドローが光の軌跡を描いたように見え、そして直感した。おそらく運命の引き（ディスティニー・ドロー）だと。

「俺はSp・シンクロバツクを発動！ フィールド上に存在するシンクロモンスターを一体エクストラデッキに戻しそのシンクロ素材となったモンスターをフィールド上に特殊召喚する」

再びフィールドにジャンクシンクロンとスピードウォリアーが場に戻ってくる。

さらに遊星はエンジェルリフトを発動しボルトヘッジホッグを特殊召喚した。

「さらに手札に存在するブーストウォリアーは場にチューナーが存在するとき守備表示で特殊召喚できる、来い、ブーストウォリアー！」

現れたブーストウォリアーを含めこれで合計レベルは8、遊星のエースモンスターである【あのドラゴン】が出てくる。

遊徒もそれを敏感に感じ取ったのか表情が緊張と歓喜に染まる、それは決闘者<sup>デュエリスト</sup>に共通の歓喜の表情だった。

「俺はレベル1のブーストウォリアー、レベル2のボルトヘッジホッグとスピードウォリアーにレベル3、ジャンクシンクロンをチューニング！」

再び空へ舞い上がるモンスター達、そして現れる星。その全てが伝承に語り継がれた赤き竜、ケツアルコアトルを象徴するシグナー六竜の内の一体を呼び出す為の布石だ。

「集いし星が新たな光を呼び覚ます、光差す道となれ！シンクロ召喚、飛翔せよスターダストドラゴン！」

星屑の名を冠するドラゴンが彗星が如く高速で飛び回りフィールドに顕現した。

翼から舞い散る光の粒子が風に流れて美しく舞って場を彩る。

彗星が如く飛翔を開始したスターダストは主を守護せんが如く遊徒を睨み付ける。

その迫力満点の姿に遊徒は好戦的に口を歪める、この戦いのために様々なデュエリストと戦ってきたがここまでカードとの絆が深いデュエリストは居なかった。

だからこそ、遊徒はそれに敬意を払い全力を持って勝つと決意を新

たにした。

「更にリバーズカードオープン！ シンクロストライク、このカードはフィールド上に存在するシンクロモンスター一体を選択して発動する。シンクロ素材にしたモンスター一体につき攻撃力を500アップさせる！」

スターダストのシンクロ素材は四体、攻撃力が2000上がりウルクの攻撃力を上回る。

ウルクとの攻撃力差は2000、食らうには高すぎる攻撃力だ。

だが遊徒はあえてその攻撃を受ける、スターダストはシグナーの龍<sup>デュエリスト</sup>その攻撃には決闘者の魂が如実に現れる。

不動 遊星という人物を知るのにはうってつけの方法だが、遊徒もただで受けるわけではない。

「ウルクの効果を発動！ 手札一枚をコストに相手の魔法、罫、モンスター効果を無効にする、シーリングセイバー！」

ウルクの剣から放たれた極光がスターダストを包み込み増大した力を失わせる。

攻撃力が等しいお互いのモンスター、ぶつかり合えば対消滅するだろう。

だが、不動遊星はあえてその道を選ぶ。

「スターダスト、聖騎士メシア ウルクに攻撃！ 響け、シューティングソニック！」

その攻撃の名のように疾風がウルクを飲み込む。

飲み込まれたウルクも一矢報いるために愛剣を投擲する、それがスターダストの胸に突き立てられスターダストも爆散した。

「…………ッ」

「カードを一枚伏せターンエンド」

「俺のターン！」

【遊星：手札0枚、伏せ三枚】

Sp c 4 5

「トラップ発動！ リビングデッドの呼び声！ 二度飛翔せよ、スターダスト！」

墓地から再びスターダストが蘇る。

そ

意地でも主を護る為に飛び立つのだろうか  
の在り様は痛々しく、それでいて美しかった。

痛みも苦しみもスターダストが引き受けて行く。ならば遊徒もそれに相応しい存在を呼び出すしかない。

「トラップ発動、ロストスター・ディンセント！ 墓地のシンクロモンスターレベルを一つ下げ、守備表示で特殊召喚する、蘇れウルク！」

再び騎士が場に現われる、しかしその姿勢は攻めではなく守護の姿勢<sup>勢</sup>。

しかし遊徒は構わない。必要なのは遊徒のもう一体の相棒を呼び出す為の布陣、そしてその舞台は整った。

手札の1枚を掴み一つ深呼吸する、気分が高揚していくのが分かつ



ていたがそれではいけないと遊徒は気を引き締める。  
ほんの少しでも隙を見せれば瞬くうちにやられてしまう。その事が  
理解できていたから。

「手札を偽りの刻印の効果、手札のモンスター1枚をコストに特殊  
召喚できる。その際このモンスターはコストにしたモンスターと同  
じレベル・カード名・効果を得る。俺は剛の刻印をコストに偽りの  
刻印を特殊召喚、偽りの刻印を剛の刻印として扱い、さらにsp-  
シンクロドライブを発動、spcが四つ以上ある時場のチューナー  
のレベルを一つ上げる。俺はこの効果で剛の刻印をレベル3にする」

これで遊徒の準備は整った、後は多大なる尊敬と畏敬の念を持って  
遊徒はスターダストと並ぶ格を持つドラゴンを呼び出す。  
そのために舞台を整えたのだ。

「レベル5となったウルクにレベル3となった偽りの刻印をチュウ  
ニング！ 集いし騎士の誇りが騎士龍を呼び覚ます、光守護する騎  
士となれ！ シンクロ召喚、騎士の誉れを具現せよ！ セイントナ  
イツドラゴン！」

光輪の中より現れたドラゴン、セイントナイツが空へ飛び立てたと  
いう歓喜を表すがごとく咆哮をあげる。

シグナー六竜の影たるドラゴン、その存在にスターダストも反応す  
る。

共鳴するかのように双方の竜の咆哮が響き渡る。  
どこか親愛の情を感じるその声に遊徒はほほ笑む。スターダストと  
セイントナイツは一説によると双子竜らしい。このデュエルはいわ  
ば兄弟の再会の場であった。

「スターダスト……？」

「デュエルを続行するぜ、遊星」

遊徒は墓地に存在するそのカードに手を伸ばす。

「墓地に存在するグレイブアックスの効果発動！ 墓地に送られたこのカードは次のメインフェイズ時手札に戻る！ そしてグレイブアックスをセイントナイツに装備！」

グレイブアックスを装備したモンスターは攻撃力を600上昇させる。

同時に相手モンスターを破壊した時デッキからカードを1枚ドロ―できる。ドロ―効果と攻撃力の上昇の優秀な二つの能力を持つデメリットとして閻属性の騎士にしか装備できないがセイントナイツの全ての装備魔法を装備できる効果がそのデメリットを帳消しにする。

「バトル！ セイントナイツでスターダストを攻撃、アースパンツアー！」

「リバーズカードオープン！ クズ鉄のかかし！」

クズ鉄で作られたかかしがセイントナイツの攻撃を防ぐ。

攻撃を防がれた以上遊徒はこれ以上攻撃することは出来ない、スターダストを破壊できなかったことを悔いつつ遊徒はターンエンドした。

【遊徒：LP4000、手札四枚、場セイントナイツドラゴン、S  
p-グレイブアックス】

「俺のターン！ このモンスターは手札からモンスター一体を墓地に送ることで特殊召喚できる。手札一枚をコストにクイックシンクロンを特殊召喚、さらに墓地のボルトヘッジホッグは場にチューナーが存在する時場に特殊召喚できる、ただし場から離れた時ゲームから除外される」

チューナーと素材モンスターが揃った、その合計レベルは7、シンクロンを素材とするモンスターでレベル7のモンスターは遊徒の知識の中には2体しか存在しない。

その両方ともやりようによってはセイントナイツを破壊できる能力を持っている。

「レベル2、ボルト・ヘッジホッグにレベル5、クイックシンクロンをチューニング！ 集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿す、光り差す道となれ！ シンクロ召喚、唸れジャンクバーサーカー！」

呼び出されたのは赤き鎧を纏いその身に鬼神を宿す戦士。

ボロボロになったその斧が歴戦の風格をにじませている。だが、その瞳に理性の光りは無くただ敵を打ち倒すことにだけ意識が向いている。

「やれやれ、凶戦士<sup>バーサーカー</sup>か。厄介な奴を呼び出したもんだ、片付けに手間取りそうだな」

「フツ、その方がやりがあるだろう？」

「同感だ、来い！」

「ジャンクバーサーカーの効果を発動！ 墓地に存在するジャンクと名の付いたモンスターを除外する事で相手フィールド上に存在す

るモンスター一体の攻撃力をコストにしたモンスターの攻撃力分ダウンさせる！ スターダストでセントナイツを攻撃、シューティングソニック！」

「……ッ……だがセントナイツは剛の刻印の効果で破壊を免れる」

だがこれにより剛の刻印の恩恵は失われた、このままではジャンクバーサーカーによって破壊されてしまう。

だが遊徒はそう簡単にセントナイツを破壊させるつもりはさらさら無い。

「畏発動！ ライジング・エナジー！ 手札を一枚墓地に送ること  
で場のモンスター一体を指定しそのモンスターの攻撃力を1500  
アップさせる」

光に包まれたセントナイツが再びその力をみなぎらせる。

その力はセントナイツがジャンクバーサーカーに対抗するのに十分な力だ。墓地に送ったカードもバーサーカーの攻撃を防げる。

「……ターンエンド」

（こっちの畏に感付いたか？）

「俺のターン、Sp・雷の双剣アルスをセントナイツに装備。さらに疾走の刻印を召喚、効果で墓地のクラストを特殊召喚！」

場に再びチューナーと素材となるモンスターが出現する。

無論、行われるのはシンクロ召喚！

「レベル4、聖騎士ウォリアー クラストにレベル2疾走の刻印を

チューニング！ 数多の戦場を駆け抜け抜けし戦士が怒りを糧に咆哮する、光守護する騎士となれ！ シンクロ召喚、蹂躞せよ聖騎士バーサーカー クラスト！」

現れたもう一体の狂戦士、<sup>バーサーカー</sup>その手に持つ斧は以前のような輝きはなく無数の刃溢れが出ている。

それとは逆にクラスト自身はその鍛え抜いた肉体は更なる筋肉に覆われている、傷自体は目立つが歴戦の匂いを漂わせている。

「バトル、クラストでジャンクバーサーカーに攻撃！」

「なんだと！？ 攻撃力は互角、相討ちにするつもりか！？」

「この瞬間クラストの効果発動！ 攻撃宣言時、攻撃対象のモンスター一体の表示形式を変更することが出来る。バーサーク・プレッシャー！」

クラストから放たれる威圧感がジャンクバーサーカーに防御の構えを取らせる。

口を僅かに吊り上げクラストはジャンクバーサーカーをその斧で真つ二つに切り裂いた。

「くっ……だがセイントナイトの攻撃力はスターダストより下、攻撃することは出来ない！」

「ああ、その通りだ。ターンエンド」

【遊徒：LP3300、手札二枚、クラスト（シンクロ）、セイントナイト、Sp-雷の双剣アルス】

「俺のターン」

遊星が引き当てたのは、Sp-エンジェルバトン。手札が無い今ありがたいカードではある、だがこれだけでは足りない。

「Sp-エンジェルバトンを発動！ カードを二枚ドローし、一枚墓地に送る」

二枚ドローし、カードを一枚選択。  
墓地に送る。さらにドローしたカードを発動する。

「Sp-エンジェルバトンを発動！」

「二枚目！？」

再びカードを二枚ドローする。

手札に加わったのはジャンクシンクロン、有用な蘇生効果を持つモンスターだ。そのカードを見た瞬間遊星の脳内に閃光のように勝利への道筋が描かれる、その道筋への第一歩として先程手札に加わったジャンクシンクロンを召喚する。

「ジャンクシンクロンの効果発動！ 墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚する、現れるスピードウォリアー！」

墓地より閃光と共に現れた疾走する戦士。

さらに遊星は墓地に存在する二枚のカードの効果を発動させた。

「墓地に存在する二体のボルト・ヘッジホッグの効果発動！ 場にチューナーが存在する時場に特殊召喚する事が出来る。ボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

スピードウォリアーに続いて現れたネジが無数に取り付けられたハリネズミ、遊星の勝利への道筋はもうすぐ終着点に到達する。

「レベル2、ボルト・ヘッジホッグにレベル3、ジャンクシンクロンをチューニング!」

背中にあるエンジンを始動させジャンクシンクロンが空へ飛び立つ。ジャンクシンクロンは3つの円環に、ボルト・ヘッジホッグは2つの星となって蒼き拳闘士を呼び覚ますための礎となる。

「集いし星が新たな力を呼び覚ます、光差す道となれ! シンクロ召喚! 出でよ、ジャンクウォリアー!」

呼び出されたジャンクウォリアー、その力は仲間との絆でさらに強固なものとなる。

ジャンクウォリアーの効果は場に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力分上昇する。

今遊星の場にはスピードウォリアーとボルト・ヘッジホッグの2体。その二体の力を受け継ぎジャンクウォリアーの力は増大する。

「ジャンクウォリアーの効果発動! シンクロ召喚成功時場に存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力分攻撃力をアップさせる、パワー・オブ・フェローズ!」

ジャンクウォリアー    ATK2300    4000

「攻撃力4000だと……!?!」

「バトル、スターダストでセントナイトドラゴンを攻撃! シュ

ーディングソニック！」

スターダストから放たれる音速の風、それに対しセイントナイトドラゴンは手にもった雷の双剣アルスを用いて防ぐ、だが貫通したダメージが遊徒を襲う。

「ッつあ!？」

遊徒LP4000 3200

「続けてジャンクウォリアーでクラストに攻撃！ 攻撃時にリバーカードオープン、シンクロストライカーユニット、シンクロストライク！ 二枚の効果によりジャンクウォリアーの攻撃力は2000ポイントアップする」

ジャンクウォリアー：ATK4000 6000

「これで終わりだ、砕け、スクラップ・ストライク・フィストオオオッ!!!」

紫紺の拳が唸りを上げて狂戦士に打ち込まれる、その攻撃力差は3200。

遊徒のライフきっかり削り取った。

排気音と共に高温に熱されたエンジン内部の空気が排出される。

激しく、そしてとても楽しいデュエルだったと遊徒は思う。遊星の最後のバトル、まだライフが残ると一瞬でも油断した自分を叱咤し



つつ遊星に視線を向けた。

「どんなに力が弱いカードでも無駄なカードなんてない。それを見事に証明したデュエルだった、感服したよ。遊星」

「いや、俺もお前のモンスターの力を最大限使いきったデュエル。楽しませてもらった」

どちらからともなく握手を交わす。デュエルは敗北したがそれでも晴れ晴れとした気持ち、遊徒は軽く挨拶を交わし遊徒はその場を去っていく。

これで全てのシグナーと邂逅した、個性豊かで腹に一物を抱えているような面子ばかりではあるがその分一度信頼が成り立てば強力なチームになるだろう。

「さーで、これからどうするかねえ」

やらなければならないことは山ほどある、それを一つ一つ片付けていかなければならない。

とりあえずさきだってはと呟き進路をシティ郊外に向ける、先程のデュエルでホイールが限界を迎えてしまったのだ。

ホイールの開発者、カナンⅡオズボーンのもとに進路を向けた。

Seventh turn . 疾走（後書き）

ジャック「後書きだ」

クロウ「おい、ジャック。もうちょい愛想よくしろよ、出番削られるぞ？」

ジャック「ふん、このジャック・アトラスのデュエルを途中で止められたのに一々このような端役に構っていられるか！」

クロウ「おいおい、終わった事なんだから気にすんなよ。そもそもって今回の話は遊星とのデュエルか、やっとこれでシグナー巡りは終わるか」

ジャック「だろうな、次回からは愛夜メインの話になるようだが。だが難航しているようだが……」

クロウ「詳しくは言えねえけど今まで書いたことのないキャラクターを書くから手間取ってるみたいだぜ。ストックもあと二話分ぐらいしか残ってねえみたいだからな、それが尽きたらしばらくは更新がストップするだろうな」

ジャック「ふん、俺はあの気に食わない男を倒せたらそれで構わないのだがな」

クロウ「ま、今後の流れに注目だな。気長に待つとするか、今回はこれぐらいか」

ジャック「では、注目カードの紹介に移るか、今回はスターダスト・

ドラゴン、遊星のエースモンスターだ」

クロウ「こいつを持ってるってことは……お前と接触した後か」

ジャック「ああ、それでこのカードは、効果破壊カードを自身をリリースすることで無効化出来る」

クロウ「しかもそのターンのエンドフェイズに場に戻るっておまけ付きだ。派生カードやサポートカードも豊富だからこれを主力にしたデッキも作成可能だ」

ジャック「何度敗れようと這い上がる遊星にふさわしいカードと言えるな」

クロウ「そんじゃ今回はここまでだ、次回の更新楽しみにしてくれよな！」

ジャック「それではさらばだ」

## E i g h t h   t u r n ・ 修 復

「……なに、やった？」

「別に、ただデュエルしただけさ」

シティ郊外、カナンⅡオズボーンの家宅にて遊徒とカナンはホイールの調整を行っていた。

遊星とのデュエルで限界ギリギリまで酷使されたフレームはあと少しの衝撃を加えるだけで崩れてしまいそうだ。

「これ、一度、オーバーホール、するべき」

「そこまで逝っちゃったか、仕方ない。頼むぞ、あとスピードワールの強制発動機能は外してくれ。容量の無駄だからな」

「分かった、ついでに、エンジンプログラム、更新、しておく」

「ん、サンキュ」

外装パーツを脇に置きエンジン部を露出させる。

エンジン自体には何の異常も無かったが周囲のフレームはやはり壊れかけている。

手間はかかるがしばらくは走り休みだろう、遊徒は愛機を一撫でするとさっさとカナンの邸宅を出ていった。

「あ、帰ってきた」

「あー、うん。また世話になるよ」

徒歩で帰ってきた遊徒、それを待っていたかのように愛夜が出迎えた。

遊徒は相変わらず微妙に距離感があるが愛夜はフレンドリーに近寄ってくる、その愛夜の態度に遊徒は戸惑ってしまう。

「さ、入って。今日の夕御飯は用意しておいたから！」

「お、おう……あんたってさ」

「ん、なに？」

少し言い淀んだ遊徒に愛夜は首を傾げるがそこに呼びに来たストラが割って入り会話は中断された。

遊徒は一人そこに残って考え込んでいた。

（聞けるわけ無いよな、母親が居なくて寂しくないのか、なんて）

「おい」

「……どうかしたか、ストラ」

「用事は終わったんだよな、なら愛夜の母ちゃんを」

「落ち着け、事は急いてを仕損じると言うだろう。この話は後でだ」

いつの間にか戻ってきたストラをいなし遊徒は家の中に戻っていく。ストラは遊徒のその態度に舌打ちしつつ後を追う、助けてくれるとは言ったが具体的な策を示してくれたわけではない。

やはりストラの中には未だ遊徒への不信感がわだかまっているのだ。

「ふむ、味醂を隠し味に使っているのか。だが一味足りんな、砂糖を一つまみ入れてみたらどうだ」

「うう……ご飯作っておとなしくさせようとしたら、ご飯にケチつけられた」

一般的な夕食風景、遊徒と愛夜しか居ないが愛夜はとても嬉しそうだ。

夕食を食べつつ遊徒は話そうと思っていた事を話し出す。

「愛夜、お前ってさ、自分のじいさんに戦えって言われてるらしいな」

「……な……」

「ストラから聞いた、両親を人質に取られてるってのみな」

淡々と愛夜を見つめながら話す遊徒、極力感情が入らないように話しているのか口調は若干固い。

対する愛夜は自分の事情が知られた事に動揺している、さらに愛夜に畳み掛ける遊徒。

「君のじいさんが何故戦いを強要するのは分からない、だが君はどうなんだ。戦いたいのか戦いたくないのか、どちらだ？」

愛夜を見据える目は深く澄んでそれが愛夜には怖かった。

愛夜は生まれたときから祖父に戦いの『道具』としてデュエルモンスターズを教えられた。

だが愛夜の父親、神夜　一真がその考え方を変えてくれた。精霊との出会い、驚くようなカードの組み合わせ、それらの魅力が愛夜の心を驚掴みにした。

だが祖父にはそれすら気に食わなかったらしい、父親はいつの間にか排除され再び厳しい生活が始まった。

何かを失敗すれば非道な虐待を受け、成功したらしたで当然とばかりに放っておかれた。

このひどい生活の意味は最初は分からなかった、だがある時祖父に連れられそれまで入ることを禁じられていた地下室に連れていかれた。

そこで語られた2000年に一度行われる戦い、そしてそこで戦うよう言われた。

……そこからの記憶は曖昧だった。

ただ記憶に残っているのは祖父の欲望、いや盲執と言すべき狂気。それと戦いへの強烈な拒否感。

「わ、たしは……」

（戦いたくない、母さんも囚われている。私は戦わなければ『いけない』。戦って勝って勝って勝って勝って、お爺様を満たさなければいけない）

「戦いたくは無いみたいだな」

「……ッ……そんなこと」

「なら、なんでそんなに脅えた顔をする。脅える位なら戦わなければいい」

静かに紡がれる遊徒の言葉に愛夜はとうとう耳を塞いで俯いてしまふ。

そこで遊徒は1つ大きな溜め息を吐くと愛夜にチョップをかました。

「悪い、言い過ぎた。この話は食後にしよう」

「え、あ」

先程の遊徒とのギャップに愛夜は対応しきれず狼狽えてしまう。

対する遊徒は何も言わず黙々と食事を進めている、やはりその姿に戸惑いつつ愛夜も食事を再開した。

「それで、だ。俺はあくまでもお前の意見を聞きたいだけだ、答えたくないなら答えなくていい。だがなこれだけは覚えておけ、お前には選ぶ権利がある。じいさんに何を言われようがやるのは結局お前だ、だからしっかり考えて選べ」



遊徒の言葉に愛夜の表情は相変わらず固い。

遊徒は1つ溜め息を吐くと持って帰っていた決闘盤を手に取る。

「決められないならデュエルだ。お前がするかもしれない戦いの予行演習にでもなるだろ、ついでにその迷いの答えとかも出るかもな」

「……………」

愛夜はなにも答えずノロノロと決闘盤を腕に嵌め込む。

デッキも同時にはめて起動させる、お互いが離れた場所まで離れて向き合う。

二人の間に夜闇の冷たい風が流れる。

「デュエルッ!!」

「私が先攻を貰います、ドロー。テラ・フォーミングを発動、魔導都市エンディミオンを手札に加え発動。さらに墓地のテラ・フォーミングを除外してマジックストラライカーを特殊召喚します」

『愛夜…………』

場に現れたのはストラ、その防御の固さはいかなる攻撃を受けきってしまう。

ストラの能力はそれだけにあきたらず直接攻撃も行える。

「さらに《魔力掌握》を発動、デッキから同名カードを加えます、そしてこれによりエンディミオンに2つの魔力カウンターが乗ります。さらにチューナーモンスター、雪の精霊を召喚」

現れた小さな精霊、だがチューナーと言われれば遊徒の顔つきも変

わる。

雪の精霊のレベルは2、ストラとの合計レベルは5。

「レベル3、マジックストライカーにレベル2、雪の精霊をチューニング。鉄槌の騎士が、冷たき雪を纏いて敵を粉碎する、魔導姫の心髄を見よ、シンクロ召喚！ 粉碎して、魔導鎚姫ストライク！」

シンクロ召喚され、鎧が白くなり少々身長も大きくなったストラ。持っていた得物はメイスからハンマーに変わっている、だが愛夜を慕うその姿は変わっていない。

「ストライクの効果、シンクロ召喚成功時デッキから魔法使い族モンスター一体を手札に加えます。私は《神聖魔導王エンディミオン》を手札に。そしてもう1つの効果、墓地に存在する魔法使い族一体につき攻撃力が200ポイントアップします」  
ストライク ATK 2300 2500

雪の精霊の種族は魔法使い族、その分ストライクの攻撃力が増加する。

初ターンは攻撃できない、愛夜は伏せカードを二枚伏せターンエンドした。

愛夜

LP 4000

手札：2

モンスター：魔導鎚姫ストライク

魔法・罫：魔導都市エンディミオン、伏せ×2

「俺のターン、俺は手札から魔法カード、聖騎士の宝札を発動。これは自分の場のレベル5以上の聖騎士が戦闘破壊された時カードを

「二枚ドロ―出来る」

「魔法が発動されたことによりエンディミオンに魔力カウンターが乗ります」

エンディミオン：M p C 2 3

「俺はさらに手札の聖騎士の斥候の効果発動、相手場上にのみモンスターが存在する時特殊召喚出来る。さらにチューナーモンスター、栄光の刻印を召喚。聖騎士の斥候に栄光の刻印をチューニング」

空に舞う二体のモンスター、そして呼び出されるのは至高の魔導師。ありとあらゆる元素を従えた魔導師がここに顕現する。

「あまねく元素を従えし魔導師が、未来へ続くロードを指し示す！  
光守護する騎士となれ！ シンクロ召喚！ 魔導の黎明、？ 聖騎士<sup>セイナイト</sup>ロード シトラス？！」

その威容は周囲を圧倒する。

だが、その力は仲間から力を受け継いだストラークにはいま一步及ばない。だからこそ遊徒は魔導師の力を強める一手を打つ。

「まずは栄光の刻印の効果でライフを500ポイント回復する」

遊徒LP 4000 4500

「そして装備魔法、光の錫杖・アルティアをシトラスに装備。さらに魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキから聖騎士パラディン・ウルクを墓地に送る」

「わざわざデッキからモンスターを墓地に送る……？」

「バトル、シトラスでストライクを攻撃！ エLEMENT・マテリアル！」

光の奔流がストライクを飲み込み、消し飛ばした。それと同時に愛夜はストライクをセメタリーに送った。

だが遊徒の攻撃はまだ終わらない、光の錫杖 アルティアの効果は装備モンスターが相手モンスターを破壊した時墓地からレベル4のモンスターを呼び出すことが出来る。

「この効果により墓地から聖騎士パラディン ウルクを特殊召喚、更にウルクの効果でデッキから聖騎士ガンナー アイヴィスを手札に加える。さらにウルクはバトルフェイズ中に召喚された、よって戦闘を行える。ウルクでダイレクトアタック！」

「あっ!？」

愛夜LP4000 2400

攻撃されたことにより一瞬よろめいたものの愛夜はすぐに体勢を立て直した。

遊徒はカードを一枚セット、ターンを終了した。

遊徒

LP4500

手札1枚

場：シトラス（シンクロ）、ウルク、セット×1

「私のターン、私は魔導戦士ブレイカーを召喚。効果により魔力カウンターを一つ乗せます、更に《魔力掌握》を発動しエンディミオ

ンに魔力カウンターがさらに2つ乗ります」

M p C 3 5

「手札の焰の妖精の効果発動、手札から魔法使い族モンスターを墓地に送る事で特殊召喚出来ます。エンディミオンを墓地に送り特殊召喚」

先程とは違う紅い妖精がフィールドに現れる。

体格も雪の妖精と同じく手のひらと同じくらいだった、また対称的な姿でどこか小悪魔的な風貌をしている。

「レベル4、魔導戦士ブレイカーにレベル2、焰の妖精をチューニング。双対の焰、一つに交わりて敵を討つ。魔導姫の心髄を見よ、シンクロ召喚！ 焰の剣姫、魔導剣姫レイカーン！」

地中から炎が吹き上がり焰の妖精とブレイカーを飲み込む。

そしてその炎が吹き飛ばされ現れたのは魔導剣姫レイカーン、その身から放たれる熱波は周囲の空気を歪めレイカーンの姿をわずかに視認し辛くなっている。

「焰の妖精がシンクロ素材にされた時、焰の妖精以外のシンクロ素材としたモンスター一体につき300ポイントのダメージを与えます。スプレッドファイア」

L P 4 5 0 0 4 2 0 0

僅かに溢れた焰が遊徒を掠めていく。

それにより遊徒のライフが300ポイント削られる、あまり大きい値では無いがそれでもダメージはダメージだ。

「レイカーンは場に存在する魔力カウンターを任意の取り除きその数×100ポイント攻撃力を上昇します。私は3つ取り除き300ポイントアップさせます」

レイカーン ATK 2600     2900

「バトル、レイカーンでシトラスを攻撃。ネフティ・アバランチ！」

火炎を纏った斬撃がシトラスの錫杖をへし折りその上シトラスそのものまでをも切り捨てた。

その余剰ダメージが遊徒を襲うが遊徒は微動だにしない、なぜなら光の錫杖 アルティアを装備していたシトラスの攻撃力は2800、2900のレイカーンの攻撃を受けてもダメージは100。そしてそのダメージを受けた遊徒の残りライフは4100。いまだに初期ライフを割っていないのだ。

「シトラスが破壊されたことで騎士の宝札の効果発動。デッキからカードを二枚ドローする」

「……ターンエンド、そしてこの時にレイカーンの攻撃力は元に戻る」

「俺のターン、愛夜、お前がそんな調子でどうする」

愛夜は相変わらず何も答えない、何事かを考えたままうつむいている。

そしてその影響がプレイングにも表れている、先ほどから愛夜はモンスターを召喚、攻撃するだけの単調な行動ばかりしている。その影響で魔導姫達も力を存分に振るえていない。

遊徒の追究に愛夜はわずかに唇を噛んだ。そんなことは分かりきっていた、自身のトラウマが甦り恐怖が体を包み込む。

「あなたに……何が分かるって言うの……じい様に逆らうことの辛さが……」

「……デュエルを続行する。俺はリバースカードオープン。《リビングデット》の呼び声」。この効果でシンクロモンスターのシトラスを場に戻す、更に《剛の刻印》を召喚。シトラスを風属性として扱いレベル6、《聖騎士マージ シトラス》にレベル2、《剛の刻印》《チューニング》

魔導師と剛の刻印が天に羽ばたく。  
現れたるは竜騎士、天を統べる騎士だ。

「天空征す竜騎士が、守護すべき民を守るため我が眼前に舞い降りる。光守護する騎士となれ！ シンクロ召喚！ 貫け、聖騎士ドラゴンマスター ジャベリン！」

「竜騎士……」

「ジャベリンの効果発動！ シンクロ召喚成功時場に存在するモンスターと同じレベル、攻守備力を持つ聖騎士トークンを一体特殊召喚する」

風が巻き起こり一瞬遊徒が消えたかと思うと次の瞬間ウルクと同じ出で立ちをしたトークンが現れた。

効果は失われているが戦線を維持することは出来る。

「バトル、ジャベリンでレイカーンを攻撃、ドラグーンダイブッ！

！  
」

「……リバースカード、《緊急召集》。レベル6以上のシンクロモンスターとバトルする時、そのバトルを終了させデッキから攻撃力500以下の魔法使い族モンスター一体を守備表示で特殊召喚する。《召喚師セームベル》を特殊召喚」

現れたのは茶色い服を纏った少女、何故か隣にははにわ。

遊徒の記憶ではあのセームベルは自身と同じレベルのモンスターを特殊召喚する事が出来る。

他のカードとの組み合わせ次第で強力なカードに変わるだろう。

「そして私のターン、ドロー。召喚師セームベルの効果発動、《湖の妖精》を特殊召喚。さらに《湖の妖精》の効果発動！墓地の魔法カードを除外してレベル4以下のモンスターを特殊召喚します、レベル3のマジック・ストライカーを特殊召喚。レベル2、召喚師セームベルとレベル3、マジック・ストライカーにレベル2、湖の妖精をチューニング！」

これより呼び出されるは魔導の力を極限まで高めた真龍。あらゆる知識をその身の糧とする者。

「魔導を統べし賢龍が、万物の法則を導き出す。世界の理よ、紐解かれる！シンクロ召喚！賢しき真龍、《マジシャンズ・スペル・ドラゴン》！」

マジシャンズ・スペル・ドラゴン    ATK2400 / DEF2300

現れた魔導龍、魔導を志すものに知を与えるドラゴンだ。無論自身が持つ力は非常に強い。



だがその力はジャベリンに遠く及ばない。

「マジシャンズ・スペル・ドラゴンの効果発動！ シンクロ召喚成功時、場に存在する魔力カウンターを乗せられるカード全てに魔力カウンターを一つ置きます」M・S・ドラゴンから放たれた光がエンディミオンに寄せられる。

エンディミオンM c O 1

「さらにM・S・ドラゴンの効果発動！ 墓地から魔法カードを2枚除外し、墓地から魔法使い族モンスター一体を特殊召喚します。《魔力掌握》を2枚除外し、墓地から《神聖魔導王 エンディミオン》を蘇生します。ただし、この効果はターンに一度しか発動できず、特殊召喚されたモンスターはエンドフェイズに破壊されます」

賢龍と神聖魔導の王が並び立つ、やはり蘇るのは一時的な所為なのかエンディミオンの姿はどこか薄い感じがする。だが魔導王と詠われたエンディミオンの威圧感はそのままだ。

愛夜はバトルフェイズに移行しトークン、ウルクが破壊され遊徒のライフは1700削られ2400まで減少する。その衝撃に耐えきり遊徒は愛夜の目を真っ直ぐに見る、その目は先程までのように鬱屈した目ではなく純粹にデュエルを楽しむ目。遊徒が愛夜にしてほしかった目だ。

「なんだ、そんな顔も出来るんじゃないか」

「え……」

「爺さんを恐れて戦うだけじゃなく、純粋にデュエルを楽しんでる、今のお前に必要なのはそれだ。お前はこのままでいいのか？ 爺さんに楽しいデュエルを封じられたままで、お前に楽しいデュエルを教えてくれた両親がそんな爺さんに捕えられてるのを許せるか？そして、何よりお前は家族が好きなのか？ 思い出せよ、愛夜、お前が一番に望んでいる事を」

「私が一番望んでいること……」

考え込む愛夜、だが愛夜はその思考を振り払い遊徒に向き直る。

「ありがとう、遊徒。だけど、その話は後にしましょう……今はただ、このデュエルに決着を」

純粹に、ただひたむきに愛夜は遊徒を見据え言葉を紡ぐ。

遊徒もその思いに応え愛夜を見つめ返す。

「私はこのままターンエンドします」

「俺のターン……ファイナルターンだ」

「え……」

「俺は魔法カード、《シンクロキャンセル》を発動！ ジャベリンをエクストラデッキに戻しシンクロ素材となった《聖騎士マージシトラス》と《剛の刻印》を場に特殊召喚する。そして再びこの2体をチューニング！」

剛の刻印とシトラスが再び交わり新たにシンクロモンスターを呼び出すための礎となる。

「集いし騎士が古の騎士龍を呼び覚ます、光守護する騎士となれ！  
シンクロ召喚、騎士の誉れを体現せよ！ 《セイントナイツ・ドラゴン》！」

呼び出されるは古の騎士龍、どのような武具であろうとも担い手となりうる力を持った遊徒が持つカードの中で最強の龍。幾度も遊徒と共に戦いをくりぬけて来た遊徒の最高の相棒だ。

「さらに装備魔法、《浄化の焰 バンディ・フレイム》をセイントナイツに装備！ このカードは炎属性の聖騎士にしか装備できないがセイントナイツは全ての装備魔法を装備できるから関係ないな」

「……そして、そのカードの効果は決着をつけれる能力を持つ、という事ですね」

「その通りだ、バトル！ セイントナイツで ・S・ドラゴンに攻撃、フレア・オーバー・ドライブ！」

炎、いや焰を纏って ・S・ドラゴンに突撃するセイントナイツ・ドラゴン。

その突撃を止めるすべを愛夜は持っていない、賢しき真龍は抗う暇もなくその身を焼かれ消えていく。

その光景に愛夜は心を痛めるがその焰が自らに迫っていることに気づいた。

「《浄化の焰 バンディ・フレイム》の効果、このカードを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、そのモンスタ―の攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「……ッ……アアアアアッ！」

襲いかかる焔、それに愛夜は身をすくませる。だが、その時彼女のデュエルディスクのセメタリーからわずかに光が漏れだしそこからマジシャンズ・スペル・ドラゴンが焔から愛夜を守った。

そして、ほんの僅かにだが愛夜はマジシャンズ・スペル・ドラゴンの言葉を聞いた。

誰にも縛られず、天に羽ばたけ

ただ、そう聞こえた。

賢龍の声はただの幻聴かもしれない、だが愛夜はその言葉に涙を流す。

私はこんなにも心配されていたのか

なのに私は彼らの気持ちを無下にしてしまった

彼らは私を思って必死に戦ってくれるのに

何もかもじい様の所為にして私は逃げた、逃げてしまった

私はッ、私は……ッ！

「私ってばホント馬鹿だ……」

地面に膝をついて顔を押さえた愛夜は涙を流す、抑えきれない激情がとめどなく溢れだす。

「ッつああああ、ああ、あああああああああああああああ  
あっ！」

「愛夜、そのまんま吐き出しちまえ、今まで腹の中で貯めこんでた  
もんをすべて、な」

「ううう、あああああああああッ！！！」

遊徒は愛夜のそばに跪くとそっと抱き締める、愛夜は遊徒の胸にすがりつき泣き続ける。今まで貯めこんでいたものを洗い流すかのうに。

ただ、洗い流すかのように、泣き続けた。

## N i n t h   t u r n ・ 試 験

キュッ、という音がなりナットが完全に締め切った事を確認する。

「……終了」

「はい、スゴいですね」

「カナンからしたら軽い雑用みたいな物だから大したことはないだろ」

シティ郊外にあるカナン宅、そのガレージでカナンと遊徒、愛夜の三人は遊徒のD・ホイール《ホイール・オブ・セイントナイツ》の組み立てを行っていた。遊星との激しいデュエルで限界ギリギリまで耐久性が削られたホイールは自然崩壊寸前だったらしく内部機関の一部に至っては完全に壊れていたとの事だ。

ともかくオーバーホールが終了しようやく《ホイール・オブ・セイントナイツ》は走れるようになったのだ。

「疲労、最大」

「お疲れ様です、カナンさん。ココアでも飲みますか？」

「依頼」

「了解です」

テンポよく話を進める二人に遊徒は感心していた。カナンは基本的に傍若無人、唯我独尊を地で行く為仲良くなる人種は少ない。

だが愛夜はあっさりとカナンの扱い方を習得していた、ちなみに遊徒はいまだに手綱を握るところか弄られ続けられている。

「はい、出来ましたよ」

「感謝……ほのめく、見事」

「あはは、慣れてますから。遊徒君の料理の腕前には及びませんが、遊徒君もココアどうぞ」

「お、サンキュー。それにしても微妙に形状変わったな、スペックにも影響あるのか？」

遊徒からの問いにココアを飲みこみつこクリとカナンは肯定する。以前の《ホイール・オブ・セイントナイツ》はスーパースポーツと呼ばれる競技用のフレームを用いていたのだが今回の件を鑑みて遊徒及びホイール本体に負担がかからないようフレームの形状を変更、その他もろもろの仕様変更に伴って操縦性を上昇させたそうだ。

「操縦性の上昇はありがたいな、正直いちいち抑え込むのが手間だったんだ」

「いや、それは先に言いましたよ。それで試験走行とかしないんですか？ 仕様変更したんですから慣らしたりした方がいいと思うんですけど」

「肯定、ゴー」

「……なに、俺っておじやま虫？」

「いや、そういう訳じゃないんだけど……」

苦笑いしながら首を横に振る愛夜。

だが確かに試験走行を行うのもやぶさかではない、ここのところ遊徒はホイールで走ることも出来ず鬱屈した気分になっていた、それを晴らすのにも丁度いいだろう。それに遊徒も行きたい場所があったのも理由の一つとしてある。

「それじゃ行ってくる。……少し遅くなるから先に帰ってていいかな」

「うっん、待ってるから。カナンさんともうちちょっと話したい気分だし」

「そうか、なら早めに帰ってくるようにするよ」  
「うん、行つてらっしゃい」

立ち去る遊徒を見送りながらカナンは思う。

(……変わった)

以前の遊徒はどこか余裕を持って生きていた。だが今の彼は余裕を持たずいつも何かに追われているように見える。  
何があつたのか、それをカナンは知っているが直接の原因とは思っていない。それについてはすでに気持ちの整理を行っているはずだしこたわりは無いはずだ。

(愛夜の件、厄介、けどあんなになること、ない……はず)

「カナンさん、どうかしましたか？」

「ん、別に。……暇」

内心をごまかして返答する、遊徒が何を考えているか、それは何も分からないがいずれ頼ってくるだろうと予想して思考を止める。

「愛夜、デュエル」

「へ？ 構いませんけど……何ですか？」

「気分」

「気分って……いや、そうですね。やります」

たった一言で答えられ愛夜は脱力しかけたがカナンの瞳に映る真剣な思いに気付き提案を受け入れる。

彼女は彼女なりに考えて物を言ってるのだ。唯我独尊・傍若無人、それゆえ人の在り方の知覚能力が高い。

だが愛夜の在り方はいまだ定まっていない。ゆえに彼女はデュエル



を通して確かめようとしているのだ、神夜愛夜という人物の在り方を、信頼する仲間である遊徒にふさわしい人物かどうかを。

「……いまだ暗闇の中、自らの在り方を定められない未熟者の身ですが、全力でお相手します！」

「未熟者は同じ、ぶつけあうのは信念。いざ尋常に」

「デュエル！」

「先攻はもらいます、私はモンスターをセット、カードを1枚セット。ターンエンドです」

愛夜

LP 4000

手札 4枚

場：セットモンスター、セットカード

「手番、ドロー。《スクラップ・エリア》発動、デッキより《スクラップ・ビースト》手札、そのまま召喚。《スクラップ・スコール》発動、デッキから《スクラップ・ゴブリン》墓地、1枚ドロー、スコールの効果でビースト破壊」

「スクラップのデッキ……」

「カード、二枚伏せ、終了」

カナン

LP 4000

手札 3枚

場 伏せ×2

「私のターン、ドロー！ 私はフィールド魔法《魔法都市エンディ

ミオン』を発動、さらにリバーズカードオープン、《漆黒のパワーストーン》、この効果で魔力カウンターを3個このカードに乗せます。その内の一個をエンディミオンに移動させます」

場に浮遊する3つの石の内1つがエンディミオンに移動し光を灯らせる。

「さらに私は手札から《ナイトエンドソーサラー》を墓地に送って手札から《焰の妖精》を特殊召喚します」

「厄介」

愛夜が墓地に落としたカードの名前を聞いてカナンはポツリと漏らした。ナイトエンドソーサラーは墓地から特殊召喚された時相手の墓地に存在するカードを二枚除外出来る。カナンが扱うスクラップ系統のカードは墓地のカードを利用する事が多い。その為墓地除外を不得手とするのだ。

「さらに私は《魔導戦士ブレイカー》を通常召喚します。この瞬間ブレイカーの効果を発動、魔力カウンターを1つ乗せます」

愛夜の言葉に導かれるようにブレイカーが持つ剣に光が灯る、やがてそれは体に流れ込みブレイカーの力を増幅させる。

「バトル、ブレイカーでダイレクトアタック！」

「……」

カナンLP4000 2100

（防がなかった？ 対攻撃用のカードじゃないの？）

「ダメージ計算後、トラップ発動。《ダメージコンデンサ》、受け

たダメージ分の攻撃力以下のモンスター、特殊召喚。《スクラップ・ゴブリン》特殊召喚」

スクラップ  
ゴブリン  
廃品が集まって出来た小鬼がコンデンサの中から現れる。  
様々な廃品が集まった末に出来たその存在は何故か小鬼の姿を象っている。

「……チューナーですか。まあ、構いません。レベル4、《魔導戦士ブレイカー》にレベル2、《焰の妖精》をチューニング！ 双対の焰、一つに交わりて敵を討つ。魔導姫の心髄を見よ、シンクロ召喚！ 焰の剣姫、魔導剣姫レイカーン！」

焰が荒れ狂い、その中心からレイカーンが姿を現す。もはや愛夜のデュエルの代名詞と言えるほど愛用するカードの内の一枚だ。そんな中、レイカーンから漏れだした焰がカナンに襲いかかる。

「《焰の妖精》の効果発動、このカードがシンクロ素材に使われたとき、このカード以外のシンクロ素材となったモンスター一体につき300ポイントのダメージを与えます」  
「……あつい」

カナンLP2100 1800

「これで終了です」

愛夜

LP4000

手札1枚

場：モンスター：魔導剣姫レイカーン、セットモンスター

魔法・罫：魔法都市エンディミオン、漆黒のパワーストーン

「こちら、手番。……《スクラップ・キマイラ》召喚、効果、《スクラップ・ビースト》、蘇生。レベル4、スクラップ・キマイラ、同レベル、スクラップ・ビースト、チューニング」

「シンクロ召喚……しかもレベル8となると考えられるのは」

「屑鉄に宿りし思念が、龍となり思いを果たす。優しき思いよ、安らかに。シンクロ召喚、大いなる空へ。《スクラップ・ドラゴン》」

バサツという音と共に屑鉄龍がフィールドに舞い降りる、眼窩は窪み不気味な雰囲気醸し出しているがなぜだか愛夜は恐怖は感じなかった。

普通なら恐怖を感じるような風貌にも関わらず恐れを感じさせないその龍に愛夜は疑問を感じたがデュエル中という事もあり一旦脇に置いてデュエルに再び集中する。

「《スクラップ・ドラゴン》効果発動、こちら、そちら、1枚ずつ破壊。《スクラップ・ゴブリン》《魔導剣姫レイカーン》破壊」

「くつ、やっぱり《スクラップ・ドラゴン》の効果は凶悪ですね」

「《スクラップ・ゴブリン》効果発動、スクラップと名の付いたカード効果で破壊、墓地からスクラップ、手札。《スクラップ・キマイラ》手札に」

<sup>セクスター</sup>墓地にあった《スクラップ・キマイラ》が駆動音と共に押し出され

カナンの手札に収まる。

「バトル、スクラップ・ドラゴン、セットモンスター、攻撃。ジャンクシユート」

「セットモンスターは《見習い魔術師》です。戦闘破壊された事で効果発動、デッキからもう一体《見習い魔術師》をセットします」

「予想内、カード、二枚セット、終了」

カナン

LP 1800

手札 2枚

場：スクラップ・ドラゴン、伏せ3枚

「私のターン！ 私はセットされた《見習い魔術師》を反転召喚してエンディミオンに魔力カウンターを一つ乗せます、そして《漆黑のパワーストーン》に乗せられている魔力カウンターをエンディミオンへ！」エンディミオン M p C 1 2 3

「さらに魔法カード《魔力掌握》を発動！ エンディミオンに魔力カウンターを乗せて同名カードをデッキから手札に加えます」

M p C 3 4 5

「《見習い魔術師》をリリースして《ブリザードプリンセス》を召喚！」

（難題、けれど守りきれる）

「ブリザードプリンセスの効果でこのターン、相手はセットしたカードを発動出来ません。バトル、ブリザードプリンセスでスクラップ・ドラゴンを攻撃、アイスハンマー！」

「攻撃力、等値。相打ち」

「カードをセット。ターンエンドです」

愛夜

LP 4000

手札 0枚

場：伏せ1枚、エンディミオン【M p C 5】、漆黑のパワーストーン【M p C 1】

「手番、《スクラップ・キマイラ》召喚。効果、《スクラップ・ゴ

プリン』特殊召喚。レベル4、スクラップ・キマイラ、レベル3、スクラップ・ゴ布林、チューニング。シンクロ召喚、《スクラップ・デスデーモン》」

「今度は悪魔ですか……」

現れた白銀の巨大な悪魔を見て愛夜がポツリと呟く。

屑鉄が集まって出来たとは思えないほどに綺麗な色合いをしている。だがそこに込められた力は本物で強力無比だ。

「バトル、《スクラップ・デスデーモン》ダイレクトアタック」  
「ッー!!」

愛夜LP4000 1300

「あいたた……一気に削られましたね」  
「終了」

カナン

LP1800

手札2枚

場スクラップ・デスデーモン、伏せ3枚

「私のターン、ドロー！ 私は伏せていた《魔力掌握》を発動して  
エンディミオンに六個目の魔力カウンターを」

「却下、《魔宮の賄賂》」

「なら《漆黒のパワーストーン》の最後の一つをエンディミオンへ  
！」

「……」

エンディミオンに灯る六つ目の魔力灯りが魔力の高まりを知らせる。

それを確認した愛夜は残りの手札の片方を抜き取り見せつける。

「エンディミオンに乗せられている六つのカウンターを取り除き《神聖魔導王エンディミオン》を特殊召喚！」

「……敗北」

「《神聖魔導王エンディミオン》の効果発動、このモンスターを自身の効果で特殊召喚した時墓地から魔法カード1枚を手札に加えます。そしてエンディミオン第二の効果、手札から魔法カード1枚を墓地に送る事でフィールド上のカード1枚を破壊します。私が選ぶのはもちろん《スクラップ・デスデーモン》！」

エンディミオンの杖から放たれる紫紺の閃光がスクラップ・デスデーモンの肉体を砕き破壊していく。

ただのソリッドヴィジョンであるはずなのだがサテライトという場所が見えるせいか因果な風景に見えてしまう。

「私は遊徒君に忘れていた事を思い出させてもらった恩があり、そしてこれからもう一度恩を受ける事になる。だから遊徒君が崩れそうになったなら絶対に助けて見せます！ 神聖魔導王エンディミオンでダイレクトアタック、魔導炸裂破！」

「……ッ！！」

カナンLP18000

カナンのライフが0になりデュエルが終了する。

いつも無言で感情が読み取りにくいカナンだが今回は分かりやすくデュエルに負けて悔しがるのと何かを納得したような感情がわずかに見てとれる。デュエルディスクを取り外し元の場所に置いて先ほどの場所に座り直した。

「気づいてた？」

「うん、遊徒君がなんだかピリピリしてるように見えたから。でも責任感が強い遊徒君でも一人じゃ抱えきれないから私たちが支えてあげないと」

「依存する可能性、あり」

「そんなときは甘ったれるなっておもいつきりビンタしてあげればいいんですよ？ 遊徒君って痛い目見ないと反省しなさそうですし」

「意外、過激」

「分からず屋には一番の薬ですから、家にも似たような子が居ましたから。扱い方は分かります」

そう言つてクスリと笑う愛夜の姿にカナンはほんの少し表情を微笑みに崩した。

「やっぱなにも無いか」

旧光邸の廃墟前で遊徒はポツリと呟いた。住むものを無くし徐々に傷み具合が激しくなるのを見ると遊徒は時の流れを感じてもの悲しい気分が沸き上がったがひとまずそれを置いておいて思考の波にたゆんでいた。

「いくらなんでもこの傷み具合はおかしいけど……イリアステルとの戦いがあつたなら仕方ないか」  
『それはどうかな？』



「……後ろを取られるとはな」

『おにーさんもまだまだ、ってことだね』

後ろから聞こえる『声』に遊徒は最大級の警戒をはらっていた。声だけを聞けば年若い、自分より幾分か若いだけの少年の声でしかない。だがそこから感じられるのは底知れない『闇』。

膨大なまでのそれがそこにあるのに気付けなかった事に遊徒は舌打ちしたい衝動に駆られるがひとまず抑える。

（こいつがダークシグナーに肉体を乗っ取られた存在なら攻撃しても意味はない。せめて何か情報を……）

『ああ、いい忘れてたけど僕、ダークシグナーじゃないからそこんところよろしく』

「ッ!？」

（思考を読まれた!？ いや、それよりもダークシグナーではないって……なら一体奴は）

『んー、あえて言うならウィックドシグナーかな?』

ウィックドシグナー

「邪なる者……?」

『そ、光でもなく闇でもない。ただの邪なる者、そんな存在さ』

にこやかな声音だがその裏に秘められたのは純然たる悪意。それに対して遊徒は無意識の内に右腕の痣に手をやっていた。赤き竜の力は悪意や闇と言った害意を持つ敵に対して強い抵抗力を持っている。それを使って背後の存在を排除する、そこまで思考を張り巡らして機を待つことにした。

「悪意だけの存在な、正直言つて有り得るのか? どんな生物であろうと対極の二面性を持つ、それなのに悪意だけってのはな」

『もちろん僕の対極存在は居るよ。もう失われてるけどね』

「……失われている?」

『フフ、ヒントはこのくらいにしておこうかな。僕が何なのかはじきに分かる、楽しみにしておいてね』

その一言と共に充滿していた気配が霧散した。遊徒は知らず知らずの内に溜めていた息を吐き出す、同時に心臓がバクバクと音をたてる。

「一体なんだったんだ、ろくに抵抗出来ないなんてお婆ちゃん以来だぞ」

悔しげに呟くが、すぐさま立ち直ると遊徒はもとの目的である場所に向かった。

「なにもない、か」

祖母とイリアステルが戦ったであろう場所を丹念に調べる。

何もないことに関しては大して気にしていなかったがここまで痕跡が無いと逆に気になってしまう。

「まあいい、今日は帰るか」

何もないなら居てもしょうがない、そう断じて踵を返すと旧光邸から離れる。すでに周囲には夜の帳が落ち視界が悪くなっている。

この時間帯ならライトを点灯しなくてはならないだろう。

「まったく、カナンにまた色々言われるだろうな……」

後の悩みを言いつのりつつ遊徒は帰路についた。

## N i n t h   t u r n ・ 試 験 ( 後 書 き )

ブルーノ「……えっと」

牛尾「まったく、更新が遅れるなら報告しろよ……」

ブルーノ「ま、まあ更新されたんだから良いじゃないですか。それで今回の注目カードは……」

牛尾「スクラップ・ドラゴンだな」

《スクラップ・ドラゴン / Scrap Dragon》    †

シンクロ・効果モンスター    星8 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻2800 / 守2000

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度、自分及び相手フィールド上に存在するカードを1枚ずつ選択して発動する事ができる。    選択したカードを破壊する。

このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、シンクロモンスター以外の自分の墓地に存在する「スクラップ」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する。

牛尾「こんな感じか？」

ブルーノ「はい、スクラップ・ドラゴンの効果は自分の場と相手の場のカードを1枚ずつ破壊するっていう一対一の効果ですね。自分の場の邪魔なカードを除去しつつ相手の場のカードを破壊できるのは優秀な効果です」

牛尾「リミットリバーとかで召喚されたモンスターがシンクロ素材に使われて残った時の処理に使えるな」

ブルーノ「他にも相手から送りつけられたカードを除去可能って言うのが使い方の一つとしてありますね」

牛尾「それじゃ今回はここまでだ。次回の更新を楽しみにしててく

れ、それじゃあな！」

## Tenth turn・狂気

「……いいんだな？」

「ええ、もう迷ってなんかいられない。じい様の戒めを今宵、絶ち切ります」

「……そうか」

夕暮れの紅い日差しの中、愛夜は決意を語る。遊徒からウィックドシグナーの話を聞いて、肉親の情からつけなかった決意をしたのだ。

「事態がそこまで進行しているのならば、後顧の憂いは取り除くに限ります。たとえそれが肉親であるじい様であろうと」

「なら、愛夜。俺は口を一切挟まない、すべて愛夜がやりきれ。自分自身でお前のじいさんとの因縁を断ち切れ」

「うん……お爺様の盲執を止められるのは同じ血が通っている私だけだから」

自分のデッキ（相棒）を握りしめ愛夜は立ち上がる。因縁を断ち切り本来の神夜としての役割を果たすため。

対する遊徒もヘルメットを二つ持つと愛夜に投げ渡した。

「送るぐらいはするよ、道案内は頼むけど」

「うん、お願い。遊徒君」

「ここが……」

「うん、神夜宗家。お爺様が居るところ」

愛夜の言葉に遊徒はなるほどと思う。一般の家庭に比べ格調高く一般人を拒絶するかのような雰囲気醸し出している。同時に遊徒は何かの視線を感じていた。

（……何者だ？）

「どうしたの？」

「いや、何でもない。行こう」

歩を進める遊徒に遅れて愛夜がついていく。ただやはり長年苦手としていた祖父と戦う決意をしたとはいえやはり苦手な事に変わりはない。

どこか恐れている様子を見せている。

『……誰の許しを得てこの神夜家の敷居を跨いでおる』

「ッ！ お爺様！？」

「へえ、アンタが劉蔵か。姿隠してないで出てきたらどうだ？」

『不躰者にいちいち姿を晒せるか。招かれざる者には早急にお引き取り願おうか。愛夜、その者を追い出せ』

こちらの様子が見えているのか愛夜に通告する劉蔵。だが愛夜はかすかに体を震わせはしたが従わず首を横に振った。

「私は……もう、お爺様の言いなりにはならない」

『……なに？』

「神夜としての役割を為す時が来ました。ですが此度の戦いの相手

は地縛神以上の尋常ならざる相手、後顧の憂いになりうるお爺様には手荒になるうとも引き下がってもらいます」

『……………』

「……………お父様とお母様は返していただきます」

静かながらも強い意志を感じさせる声を響かせる愛夜、それに対して劉蔵は沈黙を保つ。

反応がないまま数分が経ち聞こえてきたのは

哄

笑。

『何を言つかと思えば……………片腹痛い事この上ないわ!』

「お爺様、何を……………」

「愛夜、気を付ける」

唐突に遊徒が注意を促す、それを聞いた愛夜は一気に周囲を警戒する。

周囲から感じ取れるのは何かが蠢く気配。それらは明確な敵意を持つて襲いかかってきた。

「……………鼠か!」

「レイカーン、お願い!」

愛夜が咄嗟にデッキからレイカーンのカードを抜き取りディスクにセットする。

現れたレイカーンはすぐさま剣を抜き放つと炎を纏わせて一閃、鼠を切り捨てた。

「不味いわ、お爺様の使い魔なら炎も足止め程度にしかない!」

「なら一気に劉蔵の居る場所まで押し通るだけだ。行けるか?」

「もちろん!」

愛夜の肯定を受け遊徒は家宅の奥に目を向けると一気に走り出す。鼠を振り払う為にレイカーンが炎を一気に噴き出させ、それに飲み込まれた鼠は遊徒達に追い付けず次々と脱落していく。

だが波のように襲いかかるその鼠達は炎に対する本能的な恐怖もないのか次々と襲いかかってくる。

「とんだ近所迷惑だな、この鼠どもは！ どうにもならないのか！？」

「いえ、おそらく下水に居たのを無理矢理従えていると思います。これだけの数ともなれば、じきに限界が来て操れなくなるはず」

『ですが劉巖殿の力は愛夜様を除けば当代随一、それまでの時間は相当でしょう』

「どっちにしろこいつらが居なくなるのはかなり後なんだろう、だったらどうにか操っている術を解ければ……」

「それならお爺様を気絶させるか、術そのものを還すしかない」

「じいさんの所へはこれから行くから良いとして、術を還すってのは？」「術の基点となっている場所で術式を逆転させるの、そうしたら術式の効果も逆になって鼠達は解放される」

「なる、なら俺はそっちを探してくる。お前はじいさんと戦って無理矢理でもいいから気絶させてこい、機動力だけなら俺の方が上手だしな」

術師としての観点から愛夜は対処法を考察し、提案する。

それを聞いた遊徒は後者の方針をとるために一際大きな動きを取り鼠の注意を引き付けつつ離脱していく。

「レイカーン、私達も行くよ！」

『はい、後ろはお任せを』



残された愛夜とレイカーンも自身に託された役割、そして何よりも自身の因縁と決別するために愛夜は走る。

「……ハッ！」

木製のドアを蹴破り室内に転がり込む。

先ほど愛夜と別れてからすでにくつもの部屋を駆け抜けてはいるが一向に術式の基点の場所が判明せず遊徒は無駄に体力を消費し続けている。

「……どうする？」

（無駄に動けば体力を消費するだけ、そもそも術式の基点といっても俺、何も分からないしな……唯一頼れそうなのはシグナーの痣だけか）

チラリと視線を腕に向ける。遊徒の腕に宿るウィジャ眼型の痣、シグナーの証たるこの痣の力を振るえば基点の発見など容易いだろうが、この先の戦いを考えればあまり晒したくない手札である。

「けど、時間が無いのも事実。使っしかないか」

右腕に力を込めて《力》を解放する。力の奔流があふれ出し情報を遊徒に伝える。

元来、赤き竜の痣はそれぞれの形状ごとに赤き竜の部位を示している、そしてそれに見合った力をその痣に封じているのだ。そして遊徒の痣は目を表している、そしてその能力は“視る”事に特化している。力を流すことでそれが目となり情報を集める。ある意味シグナーの影として存在する遊徒にはうつつつけの力といえる。無論、代償もある。一時的にはあるが赤き竜の力が減衰するのだ、それにより闇に対する抵抗力も落ちてしまう。

「  
見つけた！」

流された力により即座に発見された術式の基点にむけて走る。幾つかの部屋を抜け出たのは何らかの地下室へ続く階段、そこへ飛び込み遊徒は足を止めた。

それは本来の姿を為していなかった。  
それは本来の生を生きていたならば幸福な生を享受していたかもしれない。

「……ゲスがッ……！」

それは本来の尊厳を奪われきった“人間だった”

「…………お爺様」

「フン、裏切り者がふてぶてしく顔を晒すか」

ギリツと歯を食い縛り劉敵の言葉に耐える。覚悟は決めた筈だった、何度も自身に刻み込んだ筈の覚悟。しかし今ここで劉敵に対面した愛夜はそれが単なる思い込みだと自覚した。

向き合っただけで体が震え、思考はまっさらになり止まってしまいそうになる。一人だけだったならば事実、思考を止めてしまっていただろう。

だが愛夜には今、退けない、思考を止められない理由がある。

「たとえ裏切者と罵られようと神夜の血を引くものとして闇から民を護る事に変わりはありません。そしてお爺様はその狂気ゆえに人を害してしまう…………だから」

「ワシを滅するか…………だが、ただでそれが叶うと？」

「思っています、相討ち覚悟、という訳にはいきませんが…………それでも私はお爺様を倒す！」

退きそうになる体を必死に抑えつけ前をにらみ続ける。

ここまでの道を切り開いてくれた遊徒、共に道を探し続けている力ナン、たった二人の仲間ではあるがそんな二人が力を貸してくれてここまで来れた。ならば愛夜はそれに応えるべくここに立っている。

「だから…………今こそ過去の自分を脱ぎ捨てる！」

ディスクを起動させデッキを差し込む。対する劉敵は愛夜が折れない事にいら立ったのか、再び鼻を鳴らすと自身のディスクを起動させ構える。

「「<sup>デュエル</sup>決闘！」」

「先攻は貰うとするかの……モンスターをセット、カードを二枚伏せターンエンド」

劉巖

LP4000

手札3枚

場 セットモンスター、伏せ2枚

「私のターン、私は《テラ・フォーミング》を発動して《魔導都市エンディミオン》を手札へ！そして墓地の《テラ・フォーミング》を除外して《マジック・ストライカー》を守備表示で特殊召喚、さらに《召喚僧サモンプリースト》を召喚、カードを一枚セット、ターンエンド！」

静かな立ち上がりを見せた劉巖と愛夜のデュエル、しかし、それは嵐の前の静けさでしかない。

嵐が来れば膠着した状況は一変し戦いが終わるまで荒れ狂うしかない、そしてその事は当事者である二人が一番理解していた。何よりも鍵を握るのはいかにして相手より早く切り札を出せるか、そして出された時が嵐の襲来を報せる。

（（それなら……私<sup>フシギ</sup>））

（（勝つ！））

## Tenth turn・狂気（後書き）

御影「今回は更新ペースが早かったわね」

カーリー「そりやそうよ！　なんたって作者さんが冬休みに入ったんだから！」

御影「正確には特別補修期間だけだね」

カーリー「そ、それを言っちゃダメなんだからー！　……そ、それで今回のお話なんだけど」

御影「とうとう神夜劉蔵とのケリをつけるみたいね……なんだか、かなりの違法行為やってるみたいけど」

カーリー「そんな現状を見た遊徒は怒ってはいるけど冷静、それにしても変な設定出てなかった？」

御影「ああ、シグナーの痣の事ね。作者さんいわく……」

『一つに集まって力を発する事が出来るならパーツごとでも力を発する事は可能なはず、だったら各パーツに特殊能力付けてもいいんじゃない？って感じで発生した設定』

カーリー「……なんだか適当な」

御影「気にしたら駄目よ」

カーリー「……もういいや、今回はここまでにしときましょう。次回を楽しみにするんだから！」

御影「ご意見、ご感想をお待ちしております……それでは失礼します！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2994w/>

---

遊戯王5D's -ANOTHER LEGEND-

2011年12月21日18時52分発行